

風雅でなし
洒落でなし

忠臣一力祇園曙

風雅でなし 忠臣一力祇園曙
洒落でなし

作者 司馬芝叟

建長寺山門

地比は唇應。初の年。彌生の空もうらゝかに。桃に柳の咲つどふ上巳の。拜禮お請の爲。足利將軍直義公。建長寺にお成有ければ。昵近の大小名追々込合我一に。肩て風切乗物の。戸さゝぬ御代の式日に門前。フシ市をなしにけり。詞ヤア片寄れ。今日は足利武將直義公。此建長寺へお成。我々主人も上巳のお禮を此所で相勧る急ぎの参勤。早々通せ。そりや此方も同じ事。大手先なれば格式有れ共此所は先勝。そこ退け。イ、ヤ先勝なれば此方から通る邪魔ひろぐなく。イ、ヤならぬ此方が先じゃ。イヤ我々が。イヤ此方と。地互に角め立別れ。いつフシ果べきとは見へざりけり。地かゝる所へ東の方。お先手を振る行列に。紋は五三の桐のとう。役義を高の武藏守。先手の近習聲を掛け。詞ヤア片寄ませい。執事高の武藏守師直公の出仕成ぞ。片寄ませいと大音に。地鶴の一聲諸大名。ハツと左右に立別れ道を開けばゆうくと。フシ御前をさして打通る。フシ跡はついて諸侯の面々。列を亂さずしとくと門内。さして三重へ入にけり

大書院

されば足利將軍直義公。上巳拜禮の爲として。建長寺の大書院に出給へば。御かたへには執事高武藏守師直。己が權威を立烏帽子素袍の袖もたぶやかに。伯州の城主鹽冶判官高貞。ついて桃井和歌三助安近。其外石堂薬師寺始袖

づれもは此所を退參。只幾重に師直殿明日の義を。ハテよくござる。魚心あれば水心有イヤサ此義は申さず共御承知でござらふ。ム、ハ、ハ、ハ、と地欲惡無道。盛の花も時あれば。散るとは白髪しらげの師直に。互に式臺諸大名表をさして三重へ出て行

櫻の馬場

地 フシ櫻は花に。顯あらわはるゝ。建長寺の櫻の馬場。一目ちもとに咲揃さきそろひ。散も始め風色は。絶景いはん方もなし。地鹽冶が家來早野勘平。當世風たうやふうのやさ男のつしのし目の麻上下。家來に持す臺の物 フシしづ／＼と出來り。詞ナコリヤ角助。執事方へ差上る其一品。南の宿坊に御入有れば。御前へ其品を。地早く／＼と フシ迫立おつたてやり。詞誠に主人判官様は。御大切な役目。それ故師直に取入事は取入つたがサテこちらが難題。おかるには咄して置たが。もふ來そうな物じやがと。地待人よりも待るゝ身の。ぎどくぼうしに後帶。携へ持し文箱より。逢た見たさに フシちよこ／＼走り。地思はず見合す顔と顔。詞そこに居やしやんすは勘平様。ヲ、おかる。よう來てたもつた。サイナア。定て待兼て居やしやんせふと。心はせいでも女の足。ヲ、そふで有る／＼。そふしておかる。頼んで置た今の事は。サアとつくりと此文箱に。認めて持て來たはいな。随分奥様の御手に似る様と思へ共。地根が拙い惡筆故。それにまだ奥様は彼師直に。添削の短冊。詞自が手で書も穢けがらしい。そなた代筆に認めてたもとの御意。新古今の古歌とおつしやつた通り書ましたが。それに其文大事有まいかなア。詞ヲ、大事ない／＼。短尺の歌も。此返事も。そなたの手あつちは知ぬ。やつぱりかほよ様じやといふて悦ぶはいの。何も角もわがみを奥様に仕立しだるおれが魂膽こんたん。地まだ咄したい事も有。どこぞへ連立て行たい物。詞ヲ、それ／＼宿坊の供部屋と。地手を引合て若い同士。伴ひ フシ行んとする所へ。詞勘平殿／＼と地呼立出る驚坂伴内。ちやつと飛退。詞是は／＼伴内様。只今御宿坊へ參る折から。陪臣の此勅

平。高家の師直様にお目見へ致し。お詞を下されし段。誠に有難い仕合。ヲ、サくそふ思ふが身の冥加。神佛を拜まんよりおらが主人を拜むがよいはさ。堅く見へても物とらかな主人師直。お頼なされた。かほよ殿の色よい返事はどふでござるな。イヤモお氣遣ひなされますな。拙者が爲には。御主人のかほよ様なれ共。師直公よりのお頼。取持致さいて何と致しませう。殊に此度。お勅使御下向に付。饗應司の役目を蒙る鹽治判官。何かのお差圖。立ふと伏ふと師直公次第なれば。此度の役義を。兎角首尾よふ。其かはりかほよ御前の色よい返事は拙者が胸。ハテ扱てそれは身共が吞込。見ぬ戀にあがれし主人師直。貴殿の働にて戀が叶ふ御満悦。判官殿の首尾は上首尾く氣遣ひ召れな地早野氏と。言つゝおかるが形そぶり。見る目も忽からくり。細目に成て。詞イヤナニ勘平殿。アノ女は何者でござるな。イヤあの女はかほよ御前の召遣ひおかると申て大發才者。ナニおかるとな。おかる。かるくくしうは申されな。ハテ扱おかるで有たよなアハ、ハ、ハ。是はく。テモ氣の軽い伴内殿。則かほよ様よりのお返事を持て参りし者。是をお前へお渡しと。地文箱渡せば受取て。詞イヤもふく是を主人に見せたらば。腰打扱て一向やくたいでござらふ。イヤ勘平殿。ちと密々にお頼申たい事がござるが。何と聞得て下されふか。ハア私にお頼とは。ナニ物でござる。拙者生れ付て。近がつゝてでござるから。アノおかるを何が只今ちよと見初るといふや。例の持病がつゝはつて。どふもかふもかふも成申さぬが。逆ものお世話次手。身共にアノ。おかるを取持て下さるまいかと。地敷から突出す傍若無人。勘平ほうと行詰り。詞そりや早。貴殿のお頼ならば。ハテ扱。コレサく武士が手を下るはいよ。成程々々。行か行ぬか知ね共。マアいふて見ませう。暫くそつちへ控へてござれ。ハア畏まつて候。アア扱おかる。もつけない事が出来て来たはいの。もつけない事とはへ。サアあの伴内が。わがみに惚て。おれに取持てくれいといふはいの。アノ侍がかへ。ヲイノウ。ヲ、きたな。あたうるさいと。地以ての外。受のわるいと此方はしらず。詞どふかくコリヤ勘公。首尾はよいかく。ハテ扱せはしない。よいやら悪いやらまだ言掛りぢや。爰へ來

ると悪い。ずつとそつちへ密たく。大分工合はよいぞ。ヤよいか。ヲツト合點しめこの兎。同時におかる。あいつが事はマアほつて置いて。今の事はいよくそふしてたもらねばならぬぞや。そりやもふお前のお頼故。どんな事でもするけれど。かほよ様には下地から惚てゐるあの師直。かはりに成て直にあふたら。地いやらしい事をせうかと。詞へテ其時はよいかげん。口先で釣ておきや。何をするも此度。御主人のお役目。どふぞ首尾よふ。サアそりや心得て居るはいな。其かはり言替した事勘平様。必違へて下さんすなへ。何の違よふ。侍冥理。未來迄も。女夫に成て下さんすか。ならいてどうせう。ヲ、嬉しと。地比翼の約束ひつたりと。羽根打。フシかはす其の風情。地見よりこなたはむつくりしやつきり。鯨踏足付鷺坂件内。是さくも裏に入る乙聲。勘平はつとそしらぬ顔。詞件内殿御用かな。イヤモ御用所か。今のは何だ。今のは。ソレ必變つて下さんすな。何の替らふ。ヲ、嬉しは。ありや何だ。エ、。アノ嬉してござりまするか。イヤありや斯でござります。あなたの様な立派なフシうるさい。ヤ可愛らしい。フンじむさい。ヤ男のよいお侍が。私に惚て下さんしたに。違ひはないか。ヲ、違ひはない。ヲ、嬉しと。思はず知ず抱付たのでござります。エ、とつともふどふじややら。どぎくくと。身共にくどいてくれるか。お身がくどくか。譯が知ぬ。知ぬ筈。どふして。サアいやと言ふてゐる。ヤアあんまり男がよふ過る。あの様なよい男を持と。修羅の種じや。いやじやと言ふてゐる。エそないにもないがなア。アイヤコレ件内殿。此相談は出来まい。よしにしたが宜い。イヤくよしにしては詰らぬ。アノおかるさへ得心して呉れば。此方は随分承知。たとへて申さば唐の楊貴妃。日本の小町などが。文玉章を送らふが。又は宮守の黒麿をふりかけふが。此方は石部金吉金兜外の女に目もやらぬ。コリヤ取持てくれ頼む。サア一體ねそめはお前に惚てゐるけれど。有様はそふ忙しなふ言ふては。恥かしがる。サア其恥かしいと云はあんまりお前が男がよい故。ナ此内に。ちやつと何所へなと。早ふくと地勘平が。しらす場合をこなたには。一所に行ふと招くやら。わるいくと双方が。思はず知らず件内が。天窓をび

つしやり詞アイタ／＼。コリヤ何て打擲する。サア。是は其様に腹立する事はないアノ爰な粹め／＼。テモ諸侍のあたまを。サア色事仕といふものは。それではいかぬ。色事仕といふものは。常住をいらぬに合たり。又はあたまを擲かれたり。既にもつておふさ徳兵衛。ソレ又はおはつ徳兵衛。其中でも色事仕の親玉となるお前もおかるに惚てゐるは。勿論々々。あいつも又お前に惚てゐるは勿論々々所に急にいくと負惜みいふて否といふ。勿論々々。そこを腹を立ずにたゝかれても。くらはされても。じつと辛抱さへすれば此戀は叶ふ成程。只今貴殿のおしめしにより。此驚伴悟りひらけたり。何でも戀さへ叶へば。どの様な事でも辛抱するは。する／＼。したふて／＼。根つから葉つからどもこも成ぬよサア／＼其氣なら。もふ氣遣ひなしじや。直にくどいた／＼。ヨツトよし／＼。歌地よしあし棕菖蒲刀やあやめ草。詞コレコレおかるの君。どふじやいやい。／＼。コレ／＼。地どふぞ離いてくれの鐘。ハハ、ハ、ハ。詞エ、傍へよらしやんすな。いやじや。／＼と地びつしや／＼。詞サア／＼辛抱する／＼。何ぼう擲かれてもだんない／＼。大事ないと。地又抱付を突とばし。勘平の手を取てサアござんせと引はれば。伴内は取ちがへ。勘平が手を取て。めつた／＼に双方へ。引つり引ばる其の内に。詞伴内様／＼。師直様の急御用。伴内様／＼。是はしたり伴内様。サア／＼早ふ／＼と地せり立られ。詞サア／＼行はいやい／＼エ、よい事には寸善尺魔。御前のお召は大かたに。此返事のことと有ふ。コレサ勘平おかるが事をと地言ふを言せず奴ども。フシ引立／＼。入れけり。地跡打見やりハ、ハ、ハ。詞いかいたわけも有物じや。まんまと首尾よふやり付た。是からがソレ。今の事。サア其事は合點なれど。何角の咄しも有によつて。ちよつと地／＼と手を取ば。詞ハテ扱はづんだ。マア待ちやいの。何言んすやら。ソレよい事には寸善尺魔。邪魔のない内。サア早ふ。地是非に／＼と引立られ。下地はすきなり御意はよし打連れてこそ 三重急ぎ行

奥方揃

歌いぞ折て。人に見せなん櫻ばな。フシ實に治れる君が代や。建長寺の庭の面。盛り争ふ花の顔諸侯の奥方女房達。銘々櫻の折枝に結び付たる三十一文字。フシ手爾葉も囁と知れたり。地仁木の後室連御前。すかりと見へぬ品容。調ノウいづれも様。今日は彌生の節句。おめてたふ存じますと。地いふにかほよは會釋して。詞誠にけふは上巳の壽。我君様は此建長寺へお成。我々をお召遊ばしたは。例年の通り都より御勅使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌を誦じて指上るが格式。則執事たる高の師直様御添削遊ばすとの事。サア申し彌生様。成程々々。及ばずながら我々も櫻によそへし此一首。お笑ひ草でござりませう。ホ、ホ、ホ。アノマア彌生様のおつしやる事はいの。地此關の戸は猶以て夫は堅い石堂殿。ほんに野に住む蛙より遼劣りし口號み。お恥しう存じます。調夫に付て此度お勅使様樂應は。鹽治様と桃井様と承はりましたが。左様でござりまするかへ。さればいな。夫判官大切なお役目故。どふぞ首尾よふ相動ます様と祈らぬ神もござりませぬ。調ほんにかほよ様の仰の通り。大切なお役目なれば。相濟迄案じるは此彌生も同じ事。御推もじ下さりませと。地女同士は上々でもフシ馴れしげに見へにけり。調ヲ、お二人様お道理でござります。が萬事に物馴でござる判官様桃井様。鷹略な事もござりませぬ。是は、糸萩様御深切なお詞。併あなたはまだ殿御をお設けなされぬ故。ホンニ、皆物がたい顔をして。油斷のならぬが殿御の常。イヤ申彌生様。桃井様は色好みと承はりましたが。必御油斷遊ばすなへ。ヲ、かほよ様のおつしやる通り。ほんにコリヤよい氣の付所。私が夫は登城より館が氣遣ひ。兎角目のとどかぬは湯殿の内。調申關の戸様。あなたは湯殿の御政道はどうなされます。サレバイナ。そこをぬからぬ政道が肝心。地湯殿の床をたよくとゆるぐ様に張せて置。鈴や風鈴太鼓鐘。下家につらりと釣して置。互に素肌の早業分取。カノ軍が始ると。ちり、んぐはらりん。どんちゃん。いかな男も是に

はげんなり。氣遣ひなしに夫の政道。皆様どふてござりますと。いへば皆々打笑ひ。互に夫の棚おろし。上々方の千話文も。別にかはらぬ様まいる。笑ひ綻ぶ。フシ其所へ地侍一人罷出。調師直公只今御添削有んと。事。大書院へお通りと。フシ言捨跡へ引返せば。地關の戸は打笑ひ。調ホシニ師直様は音に聞へた性わる男。必御油斷なされなへ。ソリヤ心得てをります。地サア／＼お出と一同に。繕ふ衣紋の色深き書院をさしてぞ

添削

地見ぬ唐土の果迄も詠る。和歌の添削は。うはの空吹武藏守。伴内が取次せしフシ艶文に。餘念詠め入る。調此文は最前伴内より取次したかはよの返事。高の君様參る。渡りを待つ入ッ橋より。ムウ渡りを待入ッ橋とは。杜若かはよ花といふ事か。ハテ憎からぬやさしいやつと地封押切。調ナニ／＼つれ／＼の。長雨に増る涙川とや。淺き渡りとは思ひながらいな船の。否には有ぬ心なれど。元より神の木の身にしあれば。只人目を憚りの關にさへられ。御返事も心ならずうつり。只此上はゆる／＼しき御げんもじの程。まつを時雨の染ばやとうつし心の我ながら。はち紅葉の色をまし候。來世も同じ契り違はぬ事を祈り。エ、可愛やつ／＼。ゆる／＼しき御げんもじの程待とは。添い／＼。ムウ君に逢瀬のかけ橋はと。地あたりの文臺きつと詠め。夫と心にフシ打點頭。調諸大名の奥方いづれも是へ通らつしやれ。地ハアと答へも一同に。媚き渡る長廊下。襦捌きしとやかに。フシ打連通る二人連。地夫と見るより手をつかへ。調師直様には御添削御苦勞に存じますと。地會釋とぼる、袂より。巾紗をそつと兩人が。フシさし置心の付届け。地師直は笑を含み。調ムウ石堂の奥方。細川の妹。御兩人の詠歌はと。地文臺をり分手に取て。調鷺の初音いかにと谷の戸を。明れば同じ君が代の春。此歌は關の戸殿。お恥しう存じます。イヤ通歌てござる。出来ました／＼と。地響るは忽ち。フシ巾紗の威徳。調扱。次は糸萩殿。春秋をひとつに見ばや武藏野に。都の花をうつ

し植^{うゑ}てき。初心^{しんしん}にござりますれば宜^{よろ}しう。イヤ。歌は中々面白^{おもしろ}けれ共。腰^{こし}のてにはは今少し。斯^{さう}なされ。春秋^{しゅうしゅう}を。ひとつに見ばやを連^つもなら。春秋の。眺^{なが}はけふぞと聊^{ちやう}ぬればよいではないか。都て歌といふ物は。詠^よ人の心につるれば。一入^{ひととち}可愛^{めづ}らしい讀^{よみ}方と。地顔^{ぢがん}つれくんと打^{うち}守^もり。詞^{こと}ちと夜分^{やぶん}には身^みが館^{やぐら}へござれ。歌の詠^よかた心入^{こいれ}を教^{おし}へてしんぜう。ナ、承知^{しやうち}なれば兩人共。下^さられよ。地ハツと計^{はかり}に慇懃^{いんきん}に。二人はフシ其座^{そのざ}を立て行。詞細川^{ことせがわ}の妹^{いも}めは。中々^{なかなか}よい頃合^{ころあひ}に成たはいと。地女子^{ぢよし}さへ見^みりや誰^{たれ}にても。移^{うつ}らふ月の武藏^{ぶさう}守。フシ見^みやる向^{むか}ふへ。しとくとフシ二人打^{うち}連^{れん}打^{うち}通^{とほ}る。詞ムウ此兩人は。桃井^{ももい}が奥彌生^{おくやう}。仁木^{にぎ}の後室^{ごしつ}連。龜末^{かめすえ}ながらと地銘^{めい}々に。言^いぬ色なる扇箱^{せんばう}さし置^お品^{びん}を。一々に。手づからしびいて。にた／＼笑^わひ。詞コリヤいづれも。いかふ御念^{ごねん}が入^いりました。受納^{じゆなふ}致^{いた}す。時に各^{おの}方^{のう}のお歌。先刻^{せんこく}より拜見^{はいけん}致^{いた}した。が中々お二人共秀^{しう}才^{さい}。添削^{てんせう}には及^{およ}ばぬ。此儘^{まづ}上覽^{じやうらん}扱^あいづれもは古^{いにし}への伊勢^{いせ}小町^{こまち}もお二人には及^{およ}ばまいと。地めつたやたらに響^{ひび}るも一物^{もの}。二人は顔^{かほ}を見合^あしてフシ目引^{めひき}袖引^{そひき}立歸^{たちかへ}る。地實^{じけ}に杜若^{かきつばた}花あやめ。フシ似^にたりや似^にたり。紫^{むらさき}の。かほよの前^{まへ}と夕^{ゆふ}ばへし。地橋^{はし}姿^{すがた}しとやかに遙^{はるか}こなたに畏^{かしこ}まる。武藏^{ぶさう}守は惚^{ほれ}々と。詞こなたは鹽治^{しんぢ}の奥方^{おくかた}かほよ殿^{だんな}な。ハイ左様^{さやう}でござります。フ、誠^{まこと}に日外^{いつぐわい}。鎌倉^{かまくら}山の星月^{せいげつ}夜^よに。ちよつと見初^{みぞ}たお姿^{すがた}。よく／＼見ればハテあてやか。近^{ちか}ふ地／＼と餘念^{よねん}なく。見^みとれ入^いたる猫^{ねこ}なて聲^{こゑ}。こなたは猶^{なほ}もしとやかに。詞そんならあなたが師直^{しぢく}様でござりますかいな。フ、いかにも。師直^{しぢく}じや。カノ高^{かう}の君^{きみ}じや。左様なればお目^めもじは初^{はじ}めて。此度^{このたび}夫判^{ふはん}官殿^{くわんだん}。大切^{たいせつ}の役目^{やくめ}と申し。自^{みづか}ら及^{およ}ばぬ和歌^{わか}の口號^{くちがう}。てにはざへ分^わちなき腰折^{こしを}歌^{うた}の御添削^{ごてんせう}。嚙^かおむつかしうござりませう。兎角^{とくかく}宜^{よろ}しう。コレサ。頼^{たの}むとはそりや何事^{なにこと}。及^{およ}ばぬ望^{のぞ}みと有様^{ありさま}は大^{おほ}ひに心配^{しんぱい}を致^{いた}したに。早速^{さつそく}の御返^{ごへん}し。イヤモ師直^{しぢく}手に取^とるより心もとけく。どふもたまらぬ。コレナ渡^{わた}りを待つ八ツ橋^{やちばし}めと。地引^ひ寄^よる程^{ほど}うるさきに。飛退^{とひのく}裾^{すそ}をしつかと取り。詞濡^ぬぬ先^{まへ}こそ露^{つゆ}をも厭^{いと}へ。そもじの心とくる上^{うへ}は。遠慮^{えんりょ}には及^{およ}ばぬ。打^うとけ召^{めし}れ。但^{ただ}しは文^{ぶん}の返事^{へんじ}が腔^{うた}か。ア、申^{まう}めつそうな。ふつ／＼かな自^{みづか}に。誰^{たれ}有^{ある}ふ師直^{しぢく}様。勿體^{もつたい}ない思召^{おもひめし}。冥加^{みやが}の程^{ほど}が恐^{おそ}ろし

い。啞々やつぱり判官が可愛からふがの。何のマア。心はとふから人こそ見へね。秋は來にけりてござります。ヲ、フシ恥しと袖覆ふ。地師直は現ぬかして。詞エ、有がたい心の底意を聞からは。二世も三世も執事冥理。そもじの仰はなよ竹く。そんなら判官様の御役目。いかにも首尾よふ動さす。自が歌の事も。添削には及ばぬてや。エ、お嬉しうござります。嬉しいが實ならちよつとく。エ、めつそうな人目の關。ハテ大事ないく。身が詞を出さぬ内は誰有つて。此所へ通る事は罷成らぬと。地師直は悔り勘平に。其場をくろめる約束とはくはらりと違ふ此様子。いかにお主の爲なれば逆あだうるさい。詞ヤ、何がうるさい身が事か。イエく判官様が。サ世の醫にも言通り遠いが花の香とこととはに。お傍に居ればつい隘阻が。いか様。誠の戀は儘ならず。人目の關に隔られ。サア適のあふ頼に互のうさ。語るが樂しみサア寝よふ。サア夫は。サア。くくくく地獄ひ寄程身をぢぢめ。うるさく悲しき詮方なさふり放さふか。イヤくく。今荒立ては夫の頼み。無足となればお主の仇と。思ひ惱むは海棠の。フシ雨を含みし其容義。詞身共はどふもたまらぬと。地たはいに成て無理無體押へる執事の横頬びしやり。詞エ、いかに執事なれば逆。アタみだらなお嗜みなされいと。地恥しめられてもこなたは夢中。拜むく帯のはし無理に引ばる煩惱を。振放して漸に。フシおかるは遁れ出て行。地跡に師直忙然と歸るかほよが後かげ。やゝ見送りしが吐息をつぎ。詞ム、今のかほよが體たらく。此狀とはきつい相違。ハテ地心得ぬとくり返し。文臺の短冊取上打詠め。詞さなきだに。重きが上の小夜衣。我がつまならぬ夫なかさねそ。コリヤコレ新古今の歌。此古歌を添削と。我に見せるかほよが心底。此文の文章とは餘程の相違なれ共。此文と短冊の。手跡は紛はぬ双方同筆。ハテ心得ぬと文臺に詠め入たる武藏守ムムかほよの前は師の辨の娘にて大内に仕へ歌道は兼好に習ふと聞く夫に此手跡の拙さ今の詞の引放しは下賤の女ム、エ、聞へた扱はかほよに身共が執心勘平に頼みし故此度判官が役目首尾よく動さふんと面ざし似たる女をつき付。此師直をコリヤ謀つたよな。エ、奇怪やうぬと地きつと見やりし師直が。心にかゝる邪佞の雲さやけき月も曇り行浮世

のさまぞ是非もなき

鎌倉御所

四ツの海靜にしてフシ草木もなびく鎌倉御所。此度勅使の下向によつて。定るお能の式禮も脇能過てお樂屋に鼓のしらべ太鼓の音廣間は馳走の役人方。馳違ふたる足利の威勢は類ひなかりけり烏帽子大紋花やかに打通通る諸大名こなたよりは執事師直權柄面に顯はして藥師寺諸共出來り。詞石堂殿いづれも今日は繁多故御挨拶も申さぬ最早お勅使もお入有てお能も半でござると執事の挨拶石堂引取はは高の殿には今日は別して御苦勞殊にお勅使にもいつもより早いお入にて混雜と承りましたが事馴でござるそこ元なればイヤ左様でもござらぬ今朝は拙者も餘程廢忙いたしました。咄し半へお次より立出る桃井和歌三助執事の前に禮義を正し先刻仰付られましたる御對顔の間。栖掃申付ましてござりまする。ヲ、出かしやつた。ア、同じ響應の役目でも笑止千萬。こなた計しんとをさつしやる。左様でござる。群侯の面々さへ登城召れたに。肝心の響應司が遅滞とは。イヤ藥師寺捨て置つしやれい。どふ言ふ家筋か鹽治殿は。役目龜略で扱々氣の毒。其くせ常から智恵有顔。じたい我儘が過申すと。地人喰馬にも相口同士。フシ事がな有れと言立る。地斯共しらず判官高定。執事の差圖の長上下。裾踏したきしづくと。フシ廣間に登城有けるが。地満座を見るより大いに驚き。詞是は高の殿石堂殿と地見廻し。詞是は桃井殿。同じ役目と申ながら。貴殿にはお早いお出仕。只今登城の砌り。お館へ使者を立ましたれば早御登城と承はつたが。貴殿は刻限より。地お早く御出仕なされしかと。時計の仕かけが違ふとは。知ずうろくう付判官。氣の毒ながら執事の前。控へる桃井石堂見兼ね。詞判官殿お装束の相違。是さ。地召換召されと控ゆる袂。詞誠に相役いづれもは大紋某は。御用意がござるか。早く。地くと石堂に。フシ氣を付られて走り入る。師直はそしらぬ顔。詞藥師寺殿。判官殿が出仕召れた

じゃござらぬか。左様／＼。只今は參られたが。何やら周章で立れしが。どれへござつたやら。どれにござる判官殿。判官殿と呼しられ。ハツ／＼。地と計袴の紐。結びながらに取致ず。出来る鹽治をじろりと見やり。判官殿。こなた今日の饗應司。何と心得てござる。ハツ／＼。イヤサ。今日は大切な式と昨日も申渡したに何故登城も延引召る最早お勅使もお入有て。お能も二番目の中入でござるぞや。エ、相役桃の井殿は。未明より登城召れてござるに。何じゃこなた。晝狐追出した様に。今頃のふ／＼と頬の皮厚くよく出仕召つたの。イヤ憚りながら今日の饗應大切なればこそ。何角お尋申度。夜前貴殿の館へ越きし所御對面下されず又々今朝コレサ／＼。こなたが尋ねにござらふかと。師直符合してをる際はござらぬ。執事たる身は御用繁多故夜の中から登城致して居る。こなたも大切な役目。一夜くらいは寢ずにしても相勤むべきを。エ、何か大かた彼かほよ殿の懐へ計這入てござる故朝寢が過る。ちと嗜まつしやれ／＼。イヤ／＼全く以て某。ア、コレ／＼鹽治殿。貴殿連參の越度。申譯には及ばぬ。地お詫なされと石堂が。おもしに成たる此場の押へ無念ながらも判官はフシ眞平御免と平伏す。伺御覽なされ師直殿判官殿が不調法をかへりみて。アレあの如くお詫申さるれば御了簡なされ何角のお差圖を。イヤ／＼石堂殿某連も意趣意恨はござらぬ畢竟今の様に申すも。役目を大切に存ずるから。此上は何角差圖を仕らふと。地うはべはとけし此場の縛諸侯の胸も廣書院。奥は謠の聲高く。謠愛こそ花の臺に泉式部が臥戸よ迎。方丈の室に入と見へし夢は覺にけり見し夢はさめて失にけり。詞アリヤもふ東北の切。次能は春日龍神。祝言終らば饗應の配膳。鹽治殿桃井殿サ、用意さつしやれ。いづれもは詰所にお控へなされ。然らば師直公。地いづれも後刻と双方へ別れてこそは。三重へ入にけり。地奥はお能も納れば。早配膳の刻限と桃井和歌三助安近。義式の小四方目八分に捧げ出。御殿の前後見廻し／＼。詞最早配膳の刻限相役鹽治殿はいづれにござる。判官殿／＼。鹽治殿と高らかに呼はる聲。ハツ／＼と。地判官高定。次の間より走り出。詞コレハ／＼桃井殿最早饗應の刻限でござるかな。左様でござる。祝言も納れば配膳の刻限。シテ御用

意はな。デモ某へは執事より何の差圖もなく。殊に見ますれば貴殿のお料理は七五三。ムウ同じ配膳の役目たる此方へは。三汁十一菜膳部も懸盤。ハテ地心得ぬと判官がさし當つたる當惑の。折しも奥より追々に。調饗應司はいづれにござる。配膳の制限成が。何故に遅參致す早く。地くくとフシ呼立る。調ハツく夫へ指上まする。判官殿コリヤどふ致さふ。サア其義はと地うろ付中。諸侯隨へ藥師寺立出。調桃井殿師直公のお待兼。配膳早ふ。サア只今指上ますれど。判官殿がと地氣兼を言せず。調ア、コレく鹽治殿に構はず貴殿は早く。じやと申して。ハテ刻限が延引致す早ふ地くくと口々に。言れて是非なく桃の井はフシ心を殘して打通る。調ア、コレく和歌三殿暫くくと地行んとするを藥師寺突退。判官殿こなたも饗應司早く御膳を持しやれ。サア其の用意はござれど膳部の相違。桃井殿へは七五三身共へは三汁十一菜と師直殿のお指圖。イ、ヤ左様な指圖某は致さぬと。地襖あらはに出立る權威を功にフシ緩怠煩。地夫と見るよりせき立判官。貴殿よりお指圖下されし式禮は。何も角も相違致して。何が相違どふ致した。サア今日登城の制限と申し。大紋を長上下と仰られし故。先刻も。イヤ夫は格別只今さし上ます御勅使への膳部も。七五三五々三は大概知て有る。かけ盤は下官の膳部。夫も知らずに饗應使勤さつしやるか。イヤ左様なれ共。貴殿が。何と申した。手前は職分格式の通りお指圖申したが。此師直が誤りか。聞誤つたはこなたの空氣からだは。ア、コリヤ何か木具の用意はないか。金銀拂底ならなせ饗應司を辭退召れぬ。イヤサ貧乏なら貧乏の様に。なぜ辭退さつしやられぬ。いづれも見さつしやれ。判官殿は貧乏故。纔な饗應の品が調はぬそふにござる。ム、ハ、ハ、ハ、ハテ氣の毒な事ではござらぬかい。左様でござる。纔五萬三千石の身上で常から贅が過る故。得ては尾が出て。鹽からいあこ恥をかゝれます。コリヤ藥師寺の仰御尤の義でござる。イヤ又何ぼふ家の規模じやといふて。分にも合ぬ役目を勤るは。下世話に言ふ人參吞て首くゝると申物でござる。左様々々どふて仕舞は生て居られますまい。首くゝるか水に溺るか。イヤ貧乏大名。大方火にくばらるゝてがなござらふ。ハ、ハ、ハ、と銘々に。師直組の大小名フシ

やうまづいてぞ嘲哂す。地判官無念さ奇怪さ。扱は我に恥辱を與へ科に落さん工みかと。重る無念をイヤ／＼。今此事を誤つては家の大事身の大事と。逆立胸を押鎖め。詞イヤナニいづれも御覽の通り師直公の御機嫌を損じ前後を忙する判官が一生懸命爰の所を御勘辨下され師直殿へお取成を。コレサいづれも師直殿へお取なしを。是申し藥師寺殿山名殿一學殿。師直殿へ宜しうお取なしを是さ／＼師直公最早饗應配膳の役目はかける定て御前の首尾はさん／＼。此度の役義仕損すると末代鹽冶の家の瑕瑾。またも頼みは下城の節。どふ致してよいやら何卒お指圖願上る。コレ武士は互いづれも／＼。傍輩の佳是申師直殿何卒御下城式法のお指圖を。師直公。いづれもコレ申。／＼／＼と地這廻り。心をつくし身を盡す。あはれは浪の捨小船沖に漂ふごとくなり。地師直心地よげに打見やり。詞何といづれも見さつしやれ。此師直が息がかゝらぬと最期。尻もつ立てとこぼへます。よい様じやござらぬか。ム、ハ、ハ、ハ、とフシ出傍題。地判官腹にすへ兼。詞ム、コリヤ判官に恥辱をあたへ。科に落さんといふ。ヲ、落さいても鹽冶判官科が有る。ヤ、何と。お勅使我君をなぜ調伏した。ナニ調伏とは。證據は則此短冊。昨日添削といふてかほよが指上し此歌。ちらせばや見ぬ唐土の鳥も見ず。桐の葉落せ秋の夜の月。御代をなみせし一首の心。何と調伏ではあるまいか。イヤ／＼奥かほよが差上しは新古今の中の。狭夜衣の此短冊か。いかにも。ムウスリヤ夫婦相對て。此師直に恥辱を與へし此古歌か。イヤサ其義は。さなきだに重きが上の小夜衣。我夫ならぬつまな重ねそ。と師直がうつ惚たを知て恥しめる此古歌。夫に得知れぬ女めをあてがひ。かほよ杯と似つこらしう落し穴へはめ。此度の役目を首尾よふ勤た上。此師直を馬鹿じやといふて笑ふのか。イヤ／＼是は師直公のお詞とも覺へませぬ。何の女を便りに大切の役目。相勤ふと存する所存は曾以て。知ぬ物が此歌をどふして知た。イヤサ其義は。但し此師直をうつけにするか。サア夫は。サア。サア。サア／＼どふじやと。地權威を功にきめ付られ。ムウと計さし俯きフシ暫し答へもなかりしが。地ヤ、有て胸を定め。詞委細の義は存せね共。もし又妻のかほよに御執心とござらば。某急度申付。譬武士

の面目を失ひ。後指をさゝると言ても。貴殿のお心に入る様に。いやでござる。こなたの喰ひ餘りのかほよ望にな
い。いやじゃ。人我につられければ我又人につらし。判官何と思ひ知たか。無念なか。口惜いか。此師直に見事立つく
か。コリヤ師直は四海の政務を預り。足利の執事なるぞ。無念ならばどふぞして見るかヨ。張合のないべら坊めだは
い。スリヤ理を非に曲て詞を盡しても。いやじゃ。どう有つても。くどい／＼。ガ又いやじゃと言たら我どふする。
ヲ、斯すると拔討に真向へ切付る眉間の大疵。是はと沈む身のかはし。烏帽子の頭二ツに切れ。又切かゝるを抜つく
ぐりつ廻る折も折。此體見るより右馬之丞走出て押とめ。詞コレ判官殿御短慮と抱きとむる其隙に師直は。館を
さしてこけつ轉びつ遊行は儕師直眞二ツと。行をとどむる其中に館も俄に騒ぎ出し。家中の諸武士大名小名。押へて
刀もぎ取るやら師直を介抱やら上を。下へと。三眞返しけり。地營中騒ぐ喧嘩の様子追々聞付家來の面々。主人の安
否を知せの往來。フシ櫛の齒を挽く如くなり。地斯と聞より早野勘平。宙を飛て逸散に走付たる大下馬先渦巻諸士を
呼留め。詞喧嘩の相人は誰成ぞと。地聞へば口々知た顔。詞ヲ、サ相人は鹽治判官殿。師直公に意趣ふくみ眞二ツに
やられたげな。我々は主人の様子。地奥様へ注進と。フシ言捨てこそ急ぎ行。地聞より勘平狂氣の如く。詞スリヤおか
るをかほよ御前に仕立。謀つたるを根にもつて。主人に恥辱を與へし故。此騒動に及びしよな。エ、地心元なき主
人の身の上。いかゞと見やる。フシ御門の口驚坂伴内家來引連出來り。詞ヤア勘平の大馬鹿野郎。儕が主人鹽治判官叶
ひもせぬほて轉業。御前を騒がす不屈と。網乗物にてたつた今見るも哀なお預け者。身が御主人は疵養生。何と高家
の威勢を見たか。アノまじ／＼とした頬はいの。地笑へ／＼と主従が。一度にどつとフシ高笑ひ。地勘平は臆れたも
煮る計に難言無禮。モウ赦されぬと拔放す。ソリヤ遁すなと家來の銘々拔連／＼切てかゝる。心得多勢を相人にして
切立／＼追行後。透を窺ひ驚坂伴内。切込刀を早足の勘平。ひるまず去らず切結ぶ。斯と遠目に馬上の石堂。ひらり
とおり立伴内を。一當うんとフシ反橋なり。詞ヤアあなたは石堂様。シイかゝる主人の一大事。一時も早く本國へし

らせの早打。ハア、重々の御心配忝なし。然らば仰に随ひ是より直様打立ん。幸御馬借用と。地ヲシひらりと打乗。御石堂様。早くお行きやれ。ハア。地飛がごとくに三重

大 星 屋 敷

地ゆるぐ共。よもや動がじ要石。其大石の底深き。光りを包む大星氏。鎌倉の騒動聞へしより城内へ相詰て。日夜の評議留主居には女房お石嫁小浪。お家の落着松風の。そよと計の音信も。ラシ胸打騒ぐ計なり。地當家の譜代お婢の。おりんも流石物案じ。詞申奥様。今度鎌倉で殿様の無分別。師直とやらいふ意地悪を。しやつふりおいはしなされた故。城中はもいやく。今日も評定々々と。親且那のお城詰。一體マア此評定はいつ埒が明ますへと。地尋ねにお石はしとやかに。詞さればいのふ。心々になるといふ。何を言ても多い諸士。束ねをなざる由良之介殿。詞も出さず見合してござるには。深い御了簡。けふは大方決着して。殉死になるか籠城か。いづれ果敢ない身の納り願ふて列に加はらんと登城した忤力彌。今年は明て十六なれど。近年殿様御病身にて御入部なき故。御目見へもまだ等閑の部屋住ながら。地生るも死るも一統と。覺悟しての今日の出席。追は武士の胤ぞやと。我子ながらも立派さを。響るは親のフシ習ひかや。地小浪は始終聞よりも。案じ重ねて申母様。殉死とやらに成ますと。お爺様も力彌様も。最ふ御下城はなされぬかと。地娘心のはかなくも。したふも道理尤と。思ふ程猶胸の戸に。洩る涙をフシ笑ひに紛らし。詞ホ、。何のマアあられもない。生は難し死は安し。生先有る忤力彌。譬死ふと言た迎。おとゝ様がよもやしお殺しなされてよい物か。地そなたと力彌の言號は勿體なくも殿様より。お差圖有ての事なれど。詞まだ兩方共若い同士。先へ延すを相談て。本藏殿にもらひ受マア此石が娘分。是非此春は婚禮と。思ふに任せぬ此騒動。是非もない事ながら。地祝言として初孫の。顔見にやならぬ大事の力彌。コレくくめつたに死してよい物かと。納得させ

る母親の。詞の尾に付婢のりん。詞イヤ申御寮人様。何ぼふ祝言なされても。若旦那は御器量よし。御油斷なさると人が取る。若外へ出なはるなら。どつこ迄も付て御出なされませへ。ア、コレおりん。そんなさがない事は言ぬ物。地痞氣は女の嗜み事。詞ヲ、あなたとした事が。そんな大氣な事が有物でござりますかいなア。何でも男の癖として。女夫に成た其當座は珍らしい故べた／＼と。夜も晝も引付て。そなたは蛸じやの。巾着のと。めつたむせうに疊をやし。扱秋風が吹や否。夫から跡は尻くらい。地観音様をかこ付て。逢に北やら南やら。行く先々を喰さがし。灰汁の垂粕後々は。捨られるのは女の常。詞必ず油斷なさんなど。地痞氣の腰をお仕着せの。下女の仇口身のうさも。誓しは紛るゝフシ其折から。地評議の席より追かへされ。心ならずも大星力彌。常に變りし其顔色。内人わるきに驚く母。詞ヤレ力彌。早下城仕やつたか。由良之助殿も一所に。何やら濟ぬお顔持。地譯を聞ぬば何ぼふても落付ませぬと右左。取巻中にむんずと座し。詞エ、口惜や母様。此力彌計は評定の席に叶はぬと。九太夫めがさへござへ。終には席をはぶかれす／＼と立歸りましたはいのふ。ヤア／＼。夫はどふして何として。地どふした譯と母小浪。尋ねに力彌は無念の吐息。詞鎌倉より知せの早打来る日よりも今日迄。日毎にかはる諸士の評定。きのふは殉死けふは又。籠城せんと己々心々の評定も。始の程は四五百人。義を鐵石と思ひの外。一日々減る人数。只今纔に四五十人。扱不甲斐なき旁と。咄しを聞たび腕こそばく。部屋住ながら此力彌。押て登城し一列に加はり度由願ひしかど。斧九太夫是をさへぎり。部屋住の大星力彌。殿へお目見へ濟ざる者。大切な評議の場所。叶はぬならぬと無得心。エ、。そんならアノ九太夫が。エ、胸欲な憎らしい。地叶はぬ願ひも理を付て。赦すが人の上に立。情といふ字も辨へぬ。心は鬼か蛇かいのふ。詞ヲ、嫁女。其恨は道理／＼。あれ程迄に思ひ詰。願ふた物を可愛そふに。恩愛の道も辨へぬ。アノ九太夫づらの憎さ／＼。イヤ／＼母様。私を思召ての其お怒り。有難ふはござりますれど。あつちは道理。此方は部屋住の身の悲しさは。是非もないやら親人迄。地歸れよと有る御仰。す／＼列座を追立られ。歸

りましたる口惜さ。御推量下されいと。拳を握り物語れば。尤じや／＼道理／＼と母小浪。俱に涙の村時雨暗間もフシ更になき所へ。地股立ち／＼しく近習の辯吾。城中の評議の一決。御注進と馳歸れば。力彌つゝと進み寄り。調シテ／＼評議の一決は。何と／＼と詰かくれば。ハッさん候今日午の上刻迄に。漸極まる評定は。鎌倉の上使藥師寺殿。皆甲冑にて弓矢を對し。地あたかも軍の備へにて向はれしを憤ふり。調矢種玉藥のつゝかんたけ。目ざましく籠城し討死せんと一決を。地聞より未練の斧九太夫。城内拔出荷物をしたみ。いづく共なく逃行しを。親旦那にはとくより御存じ。調九太夫逃去其跡にて御本心明されしは。上使に敵對弓引は奥方始御家門方。お祟り有んを忌憚り地只願道に亡君の御供申し殉腹と。事極つたる御評定。承はるより御注進とフシ言捨表へ引返す。地跡に三人顔見合せ。言ず語らず定まりし殉死の。一決親人に。最前お別れ申せしが。最早一世の別れかと小浪が思ひも一同にせきくる。涙をフシ押包み。隠すは二人が母への氣兼。お石も同じ胸の中。見せじ。聞せじ知せじと。心々に一人づゝ泣に立ちそ哀なり。地跡に力彌は忙然と。手を拱ひて獨言。調今城中の様子を聞は。彌殉死と極る評定。某逆も烈に加はり亡君の御供なすべきに。九太夫の情しらず。我をはぶきし悔しさ悲しさ。親人下城有ならば。仕様模様も有べきに。既に殉死と定まれば。最早叶はぬ此身の願ひ。十六年の春秋を綴ひ込る武士道も。詮なきけふの身の不運地口惜や殘念やと悲歎の涙に暮けるが。地思案極めて。調ヲ、夫よ。今此烈をはぶかれて。父を先立のめ／＼と。此世に生て何面目。地さは言へ我死したりと聞給はる母人の御歎さ。冥途の迷ひは一ツ。又二ツには妻小浪。さこそ數かん不便さよ。調去ながら。言號の名計にて祝言せぬが彼の仕合せ。我事を思ひ切他家へ縁付してくれよと書殘さるか。アイヤ／＼。大星力彌は最期の今女に心引されしと。亡跡迄の物笑ひ。地いかゞはせんととつ置つ。武道と孝と妹と脊の。三ツの巷に踏迷ひ心たゆたふ後の方。わつと計に泣出す小浪。はつと驚き口に手を當て。調コレ／＼コレ聲が高い／＼。いつの間に此所へ。ムウ扱は様子を聞たるよな。聞いて是が。フシあられふか。地夫の切腹する

事を。女房が知いて済かいな。言號の名計りてまだ祝言はせぬけれど。とうから女夫と思ふて居るに。調盃せぬが仕合せとは。そりや餘まり。地胸欲な。まさかの時に臨んでは。命を捨るが侍のいかに習ひと言ながら。殿御一人を月花と思ふて憂を凌ぐのは。私計か及びない。竹の園生の御身でも。たとへ月もる宿に住む。賤しい賤の女でも。末の末迄添合せ。無事で達者で兒童てひけらかそふと思ふのを。皆樂しみに暮す物。祝言さへもせぬ内に。忌はしい切腹とは。いやじゃ／＼わしや否じゃ。いや／＼と。一筋に戀を立ぬく娘氣は。眞實見へてフシ可愛らし。地さしもの力彌も今更に。無理の道理に詮方なくもてあましてぞある折から。調親且那のお歸りと。地言大聲に眉をひそめ。調ムウ一旦殉死と定まる上。御下城とは心得ず。又もや評議かはりしやらん。何にもせよ様子を聞たる上の事と地はやる心を押しづめ母にも斯と知せやりかた唾をフシ吞て待居たる。地花は櫻木武士の散際惜み大星が歸る。心にフシ一物有る。地親の心を子は知らず席に着より進み寄。調先刻の御評定。殉死と一決定まる由今又御下城なされしはいかなる子細と。地母諸共案じ危ぶみフシ問かくる。調イヤ／＼殉死などとは思ひも寄ず。とは又なせな。サレバサ此度の騒動によつて城受取の上使は薬師寺。目ざましく引受て城を枕に討死せんと。血氣にはやる若殿原。我が分別は左に有ず。銘々知行の高に應じ。御用金を配分し。命全ふ時節を待んと。殉死をとどめ罷歸つた。ムウ殉死をおとどめなされしとは我夫。そりや御比興でござりませう。イヤモ義を見てせざるは勇なしと言たは。五百年も昔の事。妻子を安樂に徳を取のが當世と。地日比に似合ぬ父が臆病。正しく諸士の物笑ひと。思へば無念さ奇怪さ。親子は顔を見合して。涙と共に傍に詰寄。調由良之助殿エ、お前はなア。此度殿の御生害御無念にはござりませぬか。過分の知行を給はりしお家の御恩は廣大無邊。かゝる時節に命を惜み。金配分とはさもしい比興な。一家中の思はく我子の手前。コレ恥しうは思さぬかいのふ。ヲ、母人よくおつしやつた。死すべき時に死せざれば死にも増る恥多し。臆病者と腰拔よと。世の人口も返り見ず妻子をお厭ひ遊ばさるか。妻子珍寶及王位菩提の障りと御佛も。正しく示し置給

ふ。地我々不便と思し召さば。妻子を捨て忠義をば。一圖にお立下さるが。誠のお慈悲お情をや聞分てたべ親人とお心をつくし身を盡し。フシ誠をつくし諫めける。地返答なければ思案を極め。物をも言はず驅出す力彌。母は押留め。調佗相かへてコリヤどこへ。イヤサ親人は臆病ても此力彌は武士の性根顯はしお目にかけますと。地とどめる母を振拂ひ。又かけ出すを呼留め。詞コリヤ待て力彌。ハア親人おとどめなされしはと。地尋ねに大星ずんど立。有合矢筒引提出。調勅此一筋の矢折て見よ。ムウ。地と其儘手に取て。何の苦もなくぼつきと折れば。又引搦んでさし付るを。力に任せて携れ共。詞折るか。イヤサ折まいがな。地ハツトけしとむ力彌の首筋。ぐつと引付引寄るを。是はと縋る兩人を。拂ひ退け。扇を持て丁々々。父の機嫌を計り兼猶豫力彌はつたと睨み。詞狼藉者其方生れ付て人に勝れし力を頼み。鎌倉へ馳行師直候ふとも。只今折し其一筋の矢の如く。終には命を失はん力又此通り一致になさばたとへ大力の其方たり共。容易く折得ぬ千筋の此矢心はいか程はやる共。切て放すはあぶない。スリヤ親人の御本心は。金醜分して身を貯ふ。親に付は孝の道。アレあの如く松が枝に巣くいし蜂がよき手本。我子を朝暮育るに。似我似我と鳴は則ち我に似よとの言教へ。蜂の巢は佛の蓮。千草萬木花散て後に實るが天の氣候。花は因なり實は果なり。因果を一時に見するが蓮。此心をとつくりと思案を致せ。解機次第親子の縁切。未來永々勸當するが。親子の心が一致せば。本心を明して呉ふ。ハツ兩人來やれと。地大星は。お石小浪を引連て。しづ／＼フシ奥へ入日陰。うつろひ渡る蜂の巢を。地力彌きつと打ながめ。詞唐土の周茂叔は。泥中に育ながら清らかに咲く蓮を愛す。又日の本の僧正遍照。此心を讀だる歌は。蓮葉のにごりに染ぬ心もて。何かは露を玉とあざむく。夫は蓮。是は蜂の巢。ハテ。地どふがなと取つ置つ千々に思案のフシ其折から。地何國よりかは飛來る山蜂。あなたこなたと庭の面。フシ花に戯れ露を吸い。フシ飛かふ内に巢の中より。數多の小蜂顯れ出。山蜂目がけ飛付風情。こなたは怒りの劍を逆立。いどむはいかにと見やる中。終に山蜂くい立られ。即座に落て死てけり。詞花を愛する山蜂を。數の小蜂が害せしは。時に取て

高の師直。地主人を害せし非道に似たりと。フシ梢に目を付け打見やる。時しもさつと山風に連て。飛來るあまたの
 山蜂。巢を八方より取圍めば。數の小蜂は寄付じと。互に争ふ羽の響き。雷のひどくが如くにて。ひるまず去ずく
 い合しが。小蜂残らず地に落れば。山蜂勇みの羽たゞし行方。しらずフシ飛失たり。地始終に詠め入たる力彌。
 詞ハア奇代の珍事を見る事かな。都て蜂は己が友を集る故。蜂起るを蜂起といふ。甚だ虫にて禮義有て。尾なきを則
 ち王と尊み。若是を殺す者有れば。必ず仇を報ふと聞。ム、親人の蜂の巢を以て示されしは眞ッ此如く群をなし。敵
 師直討んが爲。去に依て千筋の矢に心を込し御教訓。地ハ、ハ、有がたや忝なやと。天を拜し地を拜しフシ悦び勇
 む奥の間より。詞勅出かした今こそ心符合の上は。父が心底を明しけれんと。地しづ／＼立て奥庭の。障子残らず明
 渡せば。後の山手に有々と。夕日に輝く金城に。足利の簠指物翻蘇としてフシ見へ渡れば。地力彌はつと驚き。詞鹽
 治家の城中にアノ簠印は。ホ、ウ不審は尤。今日殉死の評議をとめ。明渡したる御本城役柄なれ共、氣の藥師寺。
 受取渡しの法式しらず。皆甲冑にて入城し。アレあの如く構ゆるは。我々敵對なさんかと。臆病風に恐るゝ要害。手
 もなく城を明渡し。一先お國を立退は。由良之助が深き所存。さは去ながら御先祖代々我々も。地晝夜詰たる御本城。
 詞明渡すのみ計に有らず。奥方始一家中。お下の町人百姓迄。皆ちりちりと成行も。是皆師直が舌頭故。地泉下の
 主人の御怒り。思へば無念さ奇怪さ。五臟六腑にしみ渡り。四十四の骨々も碎くる思ひを堪忍び。追付本望師直が首。
 引上げて亡君の。御墓に手向奉らば。夕邊の恨も朝の霜と。消るは兼て覺悟の此身。詞勅親人。地はかなき者は武士
 の。身の成行と計にて。親子手に手を取かはし。身をフシ震はして無念泣。地立聞身にもたまり兼。お石小浪も諸共
 に。其儘がばと泣倒れ。詞そふ言ふあなたのお心とは。しらで女のはしたない。悲しいはかない此成行。地可愛そふ
 に嫁小浪。玉椿の八千代迄と思ふ中をば引分て。まだ祝言さへせぬ先から。後家にするとはいぢらしい。詞アノ噂さ
 んの勿體ない。地見ぬ唐土にも例ない。忠臣義士をば親に持。力彌様を夫と呼ぶ。此身の果報は中々に。女御更衣に

備はるより。百倍増る身の手柄。連添妹背を樂しみに。願ふは女の常なれど。松の千とせも朝顔の。花一時も限り有。浮世と思ひ諦めりや。ゑにしを染ぬ白糸の。昔がましてござんすと。地口は立派に心にはせめて一夜の添ふしを。願ふ色目を押包み。胸に涙をせきとめる。心を汲て大星夫婦。力彌も不便さいちらしさ。こらへし涙一同にわつと計に取亂す。涙々は播磨灘汐の。フシ満くる如くなり。地折から庭へ原千崎。矢間竹森大驚ななど。廣庭狹しと込入々々。詞我々殉死の所存なれ共。大星殿のおとどめ故すこ。開城仕り。只今お國を立退我々。につくきは上使のやつ原。城門より口々に。扶持放されの鹽治浪人。脚腰立ぬ侍と。悪口雜言聞捨がたく。堪忍袋の破れかぶれ。是より城へ押かけて。藥師寺が鎌ひげ首。地引提るがせめての腹いせサ、々々、大星殿も用意々々とせり立たり。地大星制して詞ヤレ旁。上使の無禮は師直が兼ての工み。我々に狼藉をさせ越度とし。鹽治の諸士の根を斷計略。深々と乗込は龜忽々々。大功は細瑾を返り見ず。退參せんお國の境を放るゝ名殘。我も同伴仕らん。小浪は則石諸共。某が舅丹後の國へ直様立越。親子が生死の便を聞。勲は今宵止りて母小浪に一生の名殘。イヤ／＼我も御供申し。生るも死るも父諸共。ハテコリヤ跡の片付諸事萬事。女計と覺束ない。何もかも心殘のない様に。汝は跡より發足し。落付所は都山科。地心得たるかとフシ立上り。詞今宵一夜は娘御寮へ。舅が情の。地置土産。感ずる諸士も一同に。出行跡を伏拜む。地嬉しさ悲しさ取まぜて。御本望をと言たさも。憚るお石がうき思ひ。見送る名殘。行く名殘。あはれを。跡に三重とどめけり

郊

外

實に千金の春宵も心の闇路大星に。續いて出来る原千崎。竹森ななど一同に。郊外さして立出る。地空に有々散亂たる。星影佐と由良之助。詞分野に當る極星の。正しく光を失ふは。國亡ぶべき天の告。へ、々々、是非もなき世の有

様と。地見やるあなたに大手の御門廳々に亡君の在が如き本城も。今を限りと思ふにぞ名残惜げに打見やれば。城内よりは手を叩きどつと一同に打笑ふ。地あれ聞れよと若侍。はやるを制して由良之介。詞先君の御憤り。暗さんと思ふ所存はないか。地ハツと一度に立出しが。思へば無念とお城の方振返りくはつたと白眼て

川

狩 此處より三十年以前時候

歌君はつれなや。胡麻がら焚て。脊戸のかけがね。はづして待と。忍ぶあふ瀬をだまされた。ヲ、だまされた。諷ふ聲々フシ面白く。フシ田のあぜ廻る。早苗歌。川原に。遊ぶいたいの。盛り争ふ角額。唐子がつそうしよぼく。髪。顔はまだらの悪あがき。銘々高股腕まくり。紗手網手拭ひ引張て。額口よりたらく。流る汗も眞黒な。顔にいろはのじやうだんは。言ねどしれし寺子屋の。ハツあがりとぞフシ知れたり。詞申民之丞様。ちと魚が取ましたかへ。イエ／＼今日は一向獵が利ませぬ。申アノ平吉殿は此位取れましたと。地手桶見すれば差覗き。詞ホンニ餘程取ました。こちら精出して取ませうと。地挨拶がらも武家育。田畑仕まふて在所喚。フシツ所に寄集り。詞何と皆様見やしやんせ。今年は苗が大ぶさて。一ふさがいつもの十ふさ程の格好。是が實つたらすさまじい事でござんしよのふ。ヲ、それく。又今年も豊年のしるしが見へる。マア何と此様な目出たい事はないじやないかの。近い頃迄は新田足利とやらの戦ひて此伯州も田畠を馬にかけ散され。大きな迷惑で有たが。軍がやんで打つて豊年。侍衆は弓を袋。闇がしいは職人商人。大工百姓。ヲ、ソレイノ。太平の印には。御家中の子供衆が。手習ひの戻りには。魚をすくふての樂しみ。ヲ、夫く御家老の宮内様の息子殿迄が殺生をさつしやるはアレく皆様。同じ様に足輕の子の平吉迄が來てゐるはいの。コレ平吉。かゝ様が見やんしたら又呵られうぞや。イヤ餘所事じやない私等が身の上。餘まりじやうだんして居たら。親父が又呵ろぞや。ヲ、夫いの。地サアくごんせと鳴子喚くわらく。フシ打つれ歸

りけり、フシ跡は子供が打群うたぐて。小川の魚を一同どうに。追廻し／＼。罪つみも報むかいも後の世も。忘れ果はたる。フシ面白おもしろさ屏風びやうぶ襖ふすまに畫えたる。其氣色きしき、フツとや言いふやらん。地中にかさ取民之丞とくみんのしやう。詞ことコリヤとんと魚うながとれぬどふしたら取とれふぞと。地退だいた屈く顔を氣きの毒どくと。平吉へいきち傍そばへ差寄さしよて。詞こと申民之丞うしんみのしやう様。私が魚のとれる傳授でんじゆを致いたしませうかな。ナニ魚がとれる仕様しやうがあると。取とます／＼。そんなら此方こちも寺入てらいせう。教しゆへて下され平吉殿へいきちだんと。フシ皆一同に頼入たのま。詞こと左様ならば教しゆへませうと。地あたり見廻し堤つみより。打捨うちす有し簀さと笠がさ。兩手に持て傍そばに寄よ。詞ことマア爰こゝに居る六人が兩方へ引別ひがれ。其内三人は。コレ此簀さを持て川下へ廻り。水をせき留とどめなされませと。地其身は中へと一人立ひとりたち。詞こと民之丞たみのしやう様を始はじめお前まへがた二人は。川上へ廻つてコレ。此背せい笠がさで。水を川下へおしなされと。地残る二人に背笠せいがさ持せ。詞ことソレ其如ごとくかまへを付水つけみづを残らず川上より押切おしき時は一時に。水は流れて魚は皆。地簀へ姿をかくれ家と逃込所を手取早く。詞こと引上ますと辯舌べんぜつも。地流れよどまぬ川狩の智恵は計らぬ唐國からくにの。彼温公かふんこうが才智にもフシおさ／＼劣らぬ育生いくせいなり皆々はつと平吉が才智の程を感じれば。民之丞はむつと顔おもて。詞こと其様そのような淺あやはかな事で。魚が取とるか馬鹿ばか／＼しいと。地詞の尾に付定九郎。詞左様でござる。我々はやはり此儘このまま此沙手このさでで。俱々手傳てでんひ取ませうと。地子供心の意地悪いぢわるふ。當あてこすられて平吉は。耳にもかけず聞流し残りを相手にモウよい／＼。詞こと簀を上てふるふたと。地指圖さしずに合點がてんと立寄たちよてフシふるふ簀よりばらばら／＼小魚亂れて散亂さんらんす。ヤアコリヤ魚がたんと取とた。／＼と悦よろこぶ子供。平吉手桶てびりに拾ひろひ入水に放せば小魚共。頭をフシふつて悦よろこぶ風情ふうせい。地民之丞はむやくしさつと寄よて平吉が。持たる桶に手をかければ。振ふるほどいてコリヤ何となされます。詞ことヲ、何共せぬ此魚は民之丞が貰もらふたと。地又引取をはらひ退のけ。詞ことそりやお前御無理といふ物。ヲ、無理といふたら大事か。おりや無理言いてても大事ない。大星宮内が悴せじやと。地雅心みやうしんに役柄やくがらを鼻はなにかけるぞフシ憎體にくていなり。地傍からそやす源四郎。詞ことそふじや／＼。御家老の御子息様と。足輕あしがるの子の平吉とは。お月様とすつぽん程違ちがふはやい。イヤ／＼何ぼう御家老の御子息様ごしよしきさまでも。めつたに無理は言いさぬ／＼。ヤア推參すゐさんな手向てむかひするか。モウ丁簡ていけんがと

地民之丞。有合卦算追取て平吉が額際。打ば流るゝ血汐に悔り。詞コリヤ又餘まり。餘まりとは何があんまり。横着者めと又ふり上るを寺子共。とむるを留らぬ民之丞。詞イヤ惣次郎殿。喜三郎殿。お退なされと。地二人を突退コリヤ平吉。詞一腰に手を掛たが。見事此民之丞を切かよ。コリヤ面白いサア切れふかい。サア切れくゝと地意地わるく弱みへ付込難言過言何と答へも雫子と臆。フシ及ばぬ祿ぞ是非もなき。民之丞圖に乗て。詞サア相手にならぬか。おれが恐いか。是を抜て切いやいよ切ぬか。腰拔めと。地脇指引取見て悔り。詞ヤアコリヤ竹光じや。くゝ源四郎殿定九郎殿。見さつしやれ。平吉が腰の物は竹光でござる。ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。此様な竹べらでは。此民之丞は切にくいと。地刀へし折打付られ。口惜涙たち兼。モウ是迄と立かゝる是は短氣と留る子供。喧嘩々々とりくゝわめくフシ其所へ。地主を迎ひの奴共。追々かけ付抱き留。コリヤマア何を言上り。どふした事の此喧嘩と。地なだめすかせば民之丞。詞喧嘩の相手は其平吉。此竹光でおれを切ると言おつたと。地聞て奴が太いやつの。詞コリヤやい。御家老様の御子息様。足輕風情の子悴が及ぶ物か。エ、けちぶといわつばめと。地はつしと蹴られ髪亂れ。形も崩れ口惜と思へどフシ詮方泣計。地ちり打はらひ奴共。詞サ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。お怪我がない内早ふお歸り。左様ならば民之丞様。ヲ、定九郎殿。源四郎殿。皆の衆。明日御意得ませうと地別れてフシこそは立歸る。早告渡る入相の。虫の聲。フシ數そへり。地無慰やな平吉は。跡打詠めく。無念と見やる額より。血汐流れてほと走る傍に有合ふいろフシ互に行合親子の縁。詞平吉じやないか。ヤアかゝ様かと。地いふより其儘しがみ付。わつと計に泣居たる。合點行ねば母親が。詞平吉そなたは何でなきやる。何が悲しいどふしてと。地額の疵口見て悔り。詞ヤ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。そなたの此額の疵は。エ、コリヤ何で此様に疵が付た。どふした事と地尋られ。詞サア此疵は。誰が付たぞ。サア此疵は。誰が付た。サア此疵はこけました。何と。今爰でこけましたはいのふ。夫見やの。わしが常々川原へ遊におじやんなどと言

聞すに。此マア疵の付やうはいの。モ大體の疵じやない。大方石で打ちやつたか。シタガまだ轉やつたので其様に思はぬが。ひよつとマア是が人にやなど擲かれて付た疵なら。モウくく夫こそ大體腹の立事じやない。町人の子と違ひ。一合取ても武士のはし。其儘では置れぬと。地思はぬ詞もひつしりと言當られて子心に。思へば無念さ奇怪さ。身をふるはせて泣居たる。フシ心ぞ。思ひやられたり。地譯を知ねば母親は。詞ヤアくそなたはきつふふるやるぞや。エ、聞へた。疵痛を仕やる故。コリヤふるひが來たのじや。エ、コレ何ぞ藥が飲したい。コリヤマアどふせう。どふせうと。地子には目のない母親が。なてつきすりつ介抱に。親の恵みを子心に。フシ思ひ知たる其所へ。地所用有て大星宮内。當國の一家老と言ねどしるき勿體。家來召連行過る。夫と見るより袂をひかへ。調憚かりながら。大星宮内様とお見かけ申し。足輕與一兵衛が女房。ちと御無心がござります。只今悴平吉が。此所で大きな怪我を致しました。何とぞ御無心ながら御藥がござりませふならば。御所望がいたしたふござりますと。地餘義なき頼みに立留まり。詞ナニ寺岡が悴。怪我したとな。夫は氣の毒。シテ疵は痛むか。どふじやく。疵口より風など引ば。一大事隨分氣を付け介抱仕やれと。地腰より印籠取出し。詞コリヤ氣付なれど疵に付ても苦しくないと地渡せば取て押いたさき。詞是はマアく冥加ない。サアく平吉。御家老大星宮内様が。御藥をやらふとおつしやる程に。ソレ有難ふ戴きやと。地印籠渡せばきつと詠め。詞フウ何と言しやる。此藥は御家老の大星宮内様から。エ、此藥は否じやはいと。地印籠はつたと打付て。母様ござれと理無やりに親の手を引かけ出せば。心ならずも母親は。フシ俱に引れて走り行。地跡打見やり眉に皺。印籠取上ふし顔。詞御家老の大星様。藥は入らぬとつゝといたは。ハレきつい肝癪持ては有ると地邊見廻し落ちる手本。詞ム、ドレコリヤ是。家中の子供の手本。エ、掬は八ツあがりのじやうだんに。此所で惡あがき致した上での口論と相見へ。血の付し此手本。イヤ申。是に若旦那様の御定紋の付ました。卦算がござりますと地差出す手に取上。詞ムウ悴が卦算。ソレまだ取散し有る草紙共。残らず集めて持歸れ。御家老の大星様。此

薬は否じやはやい。ムウ。血汐の付し悴が卦算。此手本。ハテナア。地と胸に納めし假名手本。家來に持たせ大星は屋鋪をさして三重へ歸りける

宮内屋鋪

地物がたき。フシ武家の家風も。高舞造り。伯州鹽冶の國家老大星宮内が一構へ。掃除の役はお仕着せの奴が切水竹箒。フシ一ツに集る塵芥肩も背骨もフシしたく息。地走り近付平吉が。夫と見るより。詞イヤコレ角助殿。民之丞様はまだお目が覺ぬかの。ホウコリヤ平吉か。何の用で早く出て來た。若旦那はまだお休み。ム、そんならお居間は。ヲ、サ若旦那のごさる所は。此門をば這入。右手をずつと行と廻り縁が有るは。エイカ其縁の向ふに。大きな手鉢が有所が則お居間。エ、左様ならばと地門内へ。這入を押留ア、コリヤ。詞若旦那には今やなどお目の覺る事じやない。後に緩りと出て來いと。地いへば平吉詞を工み。詞夫でも昨日お約束申て。覺寢て居ても大事ない。起してくれとの頼み故。ナンダ早ふ起せとお頼みなされたか。サア明日は早々朝習ひに行とおつしやつた故。ム、夫で早々出掛て來たか。ソレハそふよ。シテ親仁は内に居るか。アイ。イヤ。内には居るまい。與一兵衛は御城の御番。まだ戻りはせまいがな。アイ。エ、此奴何を言ても。アイくと地帽子まばゆき風情なり。詞何とあんどうじ町ぐらいには聞へるかいやい。ハ、ハ、ハ、コリヤ平吉。我も咄せ。マア下に居よと地留られて。心はせけど這入もならず。夫とむかふを指さして。詞アレあれ。アレ何方やら知ぬが向ふから。お歴々の御出じやと。地聞て角助立上り。詞何お歴々のお出とは。地どれ。何處にとフシうろ。眼。地仕濟したりと平吉は。そつとはづして門内へ。忍び込共知ざる故。詞コリヤ。平吉よ。エ、どなたも是へお出はないはい。つがもな

い啞をつき。悔りをさせおつた。コリヤ平吉。ヤ此奴どこへか行おつた。髭くいそらした角助を深い所へやりお

つたと。地つち咄はなき。門内かどうちさして 三重みへへ入いにける。地居ぢゐ眠ねれる。フシ物ものかは夢ゆめを。驚おどろかす庭木にわぎのかげを平吉へいきちが。拔足はくそくさし足あし縁側えんがはへ。そつと這寄はよりはい上あり。覗のぞけば内うちに フシすや。軒のき。地仕ぢしすまじたりと腰刀こしやう鯉口こゝろしめし一討いっとうと。行んとせしが立どまり。詞イヤ。一ひと間まへ切入きりい入い若仕わし損しんじては猶なほ口惜くちい。民之丞たみが目めがさめたら。手水てづつ遣つかふは知した事こと。そこを窺うかがひ只一討いっとうそふじや。地ちと一人言ひとりごと。念力ねんりき通とす手水てづつ鉢はち蔭かげに忍しのんで フシ窺うかがひある。地奥ぢおくより出るでるいたいけ盛さかり。民之丞たみが弟小三郎あにま。障子しやうし細目こめにさし覗のぞき。詞兄あに様さまはまだお休やすなされてござる。こちや手習てなづひをしませふと。机つくにかゝる其所ところへ乳母によう諸共しよどもに。姪共めども。詞コレハ。小三郎せうざん様さま。お早はやう御稽古ごぎよなされますなふしてアノ清書しやうしよをなされてかへ。ヲ、夕部ゆふべ清書しやうしよはして置おきました。今朝けさ兄あに様さまが寺屋てらやへお出でなさるゝ時とき。お師匠ししやう様さまへ持もて行いて貰もらはふと思おもふて居ゐます。ヲ、夫そはお早はやふ出来きました。兄御あに様さまのおひなる間まに。マア清書しやうしよを奥おくへいておかゝ様さまに。イヤ。そこへ行いて見みませうと一間いっまより。フシ聲打こゑうちかけのつま戸由良とよら。襖押明ふすまおしあきしづ。と我子わがこの傍そばに押直おしなおる。地小三郎ぢせうざんはおとなしく。詞母様ははさま此清書しやうしよ御覽ごらんじて下さりませと。地指ぢさし出す清書しやうしよ手に取と上ある。詞ヲ、見事けんじによふ出来きました。是こゝから随分ずいぶんと精せいを出でして。民之丞たみに追拔おひぬやう。地仕ぢして見みやいのと勵はげます。詞に フシはつと笑顔えがはして。詞アイ。夫そは嬉うれしうござる。追付おひつき兄あに様さまに勝かち様に。随分ずいぶん稽古ぎよしませふと。地詞ぢことに遠慮えんりよへつらはぬ。雅心やしんを引取ひきと乳母によう。詞是こゝはマア和子わし様さまとした事が。そりやマア何なにをおつしやります。兄御あに様さまは奥様おくさまの御子ごし。あなたは御妾腹ごめはらの事ことなれば。兄御あに様さまとは義理ぎりある中うち。其義理ぎりの有ある兄御あに様さまに追拔おひぬとの御一言ごいっごん。いかに雅やい御身ごみじや迪よ。物事ものごとに氣きを付つて。おつしやりませと地乳ぢちの人の。詞戸由良とよらは引取ひきとて。詞是こゝは又乳母またにようの改かつた。賢妾腹けんめはらにもせよ。胤たまはかはらぬ夫をうとのみば兄弟あにの子供こらを。何なんの龜略きりやくに思おもひませう。生なれ付つて小三郎せうざんは手習てなづひ學文がくぶん武藝ぶぎを好このみ。どふぞ教おしへて下さりませと不斷ふだん爺御やごをせがんで居ゐやる。又兄民之丞またあには兎角とかく武術ぶじゆつは好このまずに。小鳥こどり狩かりの川狩がわかりのと。只殺生ちしやうを好このみやつて夫故父御そごふごのお呵あを。聞度きんた毎まいに此母このははが地教ぢけうへが悪いわるいと言いはるゝつらさ。折々おつく母ははが言聞いひきこす教訓けうくんも遊びあそびかふじてうはの空そら。夫故そご今年ことし十五じふごになれと。まだ殿様でんさまにお目見めみへもよふさせぬは。あの様さまな氣儘きりぎり者もの。詞

若ひよつと御前ごぜんで仕落しおちても有ては。此大星の家の疵きずと父御もおつれなされず。正眞しやうしんの指ゆびがきたない連。切ても捨られぬ血筋ちよすぢの因果。民之丞も小三郎も兩の手と同じ事。わしが心に隔へだてる心はない程に。地小三郎は元より乳母もそなた衆も。必隔かなたてたもんなやと。物ものごし詞柔しやうかに道に武家の奥ゆかし。折から小庭へどいや。銘々めいめい草紙くさしたづさへて。家中のフシ子供が一連に。詞民之丞様寺屋へお出なされぬかへと。地音おとなふ聲にヲ、是は仕たり。友達衆が誘さそひに見へたのに民之丞はまだ起おきやらぬ。コレコレ乳母。そなた衆もいて起しておじやと。地詞に皆々打連立一間へこそは入にけり。地跡に戸由良は笑顔して。詞お前方待遠に有うが民之丞が朝飯支度あさはんしだくの間次の間に待合して下されと。言に皆々左様なら。暫く次にて待ませうと打連てこそ入にけり。よき侍さむらいは風流もフシ好む燕居えんきよの。一間なる。爐前いろまへにかゝり獨服に。閑かんを樂たのしむ主の宮内。茶事より外は餘念なし。地折からフシ奥庭さはがしく。はつしと打合ふ音。何事やらんと打見やる庭先植込用捨なく切込平吉民之丞。請太刀ながらヤレ待て平吉何故の此狼藉しやうじやく。マア何故とは比興ひきようであらふ。昨日川原の惡口難言あくこうなんげん忘れはせまいと地烈はげしくも付入る平吉詮方なく火花を。ちらす二人の有様地見るより宮内は扱あつかこそと。打合ふ物音知せじと。有合ふ蹴追取て。歌其船軍今は早はやに閤かん浮うきにかへる生死の。海山一同に震動しんどうして。船よりは関との聲。思はず來かゝる戸由良が悔がり。庭には互に打合ふ双音。見るにひあいさ危なさに。かけ寄る女房を支ゆる宮内。我子を尋ねて與一兵衛來かゝる切戸の外そと面より猶豫ためためふ内には切結ぶ武士の育の直燒双。付入刀請はづし弓手の肩先民之丞。切込られてだち。母は見るより悲しさの。心あせれと詮方涙。ソレ。油斷仕やんな民之丞。負てくれなも身は叶はず。詞の助太刀あせる母。父は構はず謠うたのせめ船軍のかけ引浮枕うきしづとせし程に。春の夜の浪より明て。敵と見へしはむれ居る鷗鷺おうろの聲と聞えしは。浦風成けり高松の。朝嵐あさかぜとぞ成にける難なく氣がさの平吉は民之丞をまくり立馬手の腕うでを打落すわつと一聲魂たまぞる内。平吉透さず乗かゝり民之丞覺えたかとあぐりゑぐられ七轉八倒しちてんはつたう。見る母親は堪たりかねあつと計に伏ふし沈しづむ。勝負を見届け與一兵衛。つゝと寄て我子を引すへ。纏打

かくれば平吉は。につこり笑ふて悪びれぬ。心の程こそ遅しき跡を慕ふて女房が我子の姿見るよりも。狂氣の如くかけ込で。ヤイ／＼。平吉には何科有て何者が細かけたヤイ／＼。申し／＼。宮内様平吉は何の科でアノこちの人も其處にか。平吉を縛らして何でだまつて居やしやんすぞ。どふした科で此細目譯を聞して下さんせ。ヤア女の差出る事はないすつ込て居おらふと地呵まくれ恨めしげに。詞コレ與一兵衛殿。こな様はナア氣が違ひはせぬかいのふ。夕べ詰番でお城へ上らしやんしたによつて。今朝は大方早からふと。夜が明ると其儘起たら。平吉が寢所に居ぬはいな。ハア情ないもふ悪あがきに行たか。又お前が戻らしやんしたらもふ／＼。呵らしやんすて有ふ。ちやつと呼で來て置ませふと。そこら近所をうろ／＼尋る内。誰言共なふ民之丞様と平吉が。此お屋敷で喧嘩／＼と人の沙汰。聞付るより心ならず足も地に付事かいな。來て見れば此しだら。思ひがけない此細目。様子を問へば呵付すつ込てけつかろふといかに男のこうけじや迎。餘まりむごい胸欲じや。詞そんな事言ず共斯々いふ科で平吉は。命を取らるゝとたつた一言。私にも得心さしてくれたがよい。譬何ぼの科じや迎わしも得心せぬ内は殺さぬ。／＼と地我子にひしと抱き付。恨みかこつぞ道理なる詞ヲ、其恨は尤じや。おれじやといふて肉身の悴。何の繩が掛たからふ。明六ツが鳴と御門を開き。番がはりして戻る道で悴に行逢ふたれば。おれを小影へ呼てちと意恨有て民之丞殿を打果しに参ります。今迄はよふ可愛がつて下さつた。是が親子の此世の名残か、様にも暇乞がしたいけれ共泣しやるで有ふけつく未練が起つては悪い。跡で呵らしやれぬ様。斷言て下されと。言捨にかけ出す待て／＼と呼留ても雲霞と姿は見せず。直に跡を追て御門前迄來て見れど何の事なくまだ御門はしめて有。こいつはまだ來おらぬそふなど。それから方々捜しても行衛は知ず又立戻れば此しだら。留ふとは思ふたれど。コレ宮内様は奥様を引留ながら。二人の勝負を御覽の體差控へて見届る内とふ／＼民之丞様を仕留おつたヲ、出かしおつたといふに言れぬお家の御家老大星様の御子息民之丞様を手にかけた悴。此親が細かけたはお上へ潔白無得心な胸慾なといふ其方よりは。繩をかけて渡す

おれが心。ハテどの様に有ふと思ひをるぞいやい。道理でござんす。與市兵衛殿のふ堪忍して下さんせ。詞コレのは平吉。今と様の言しやんす通り。其喧嘩の様子を早ふ言や。其様子に寄てそなたの命。助かる筋の有まい物でもない。又そなたもよくの事でなければ。アノ民之丞様を打果しも仕やるまい。大方々々あつちが悪かるふ。イヤサわがみが悪かるふ程に。マア其様子をとく様にもかゝ様にもいふて聞しや。ヤ。ヤ。コレ地言て聞してたもの。歸らぬ事をくどき泣。地平吉涙の顔を上げ。詞未練にござるか様。人を殺して助かる筋はござりませぬ。意恨の様子は宮内様へ直々に。申上たふござります。どふぞお願ひ申て下されと。地始終を得と我胸に。じつとたも少し健氣の振舞。戸由良は猶も腹立涙。詞エ、意恨の様子を直々に。言上せふとは推參な。譬道理が有るにもせよ。大星宮内が總領民之丞が敵。自が手にかくる。覺悟せいとずんと立。地長押にかけたる長刀追取。向ふ石突宮内はしつかと。詞ヤレ待て戸ゆら。何事も皆某が胸に有る控へて睨。是が控へて居られませふぞ。あなたがお留なされまする故。じつとこらへて居ました。お放しなされて下さりませ。ヤサお身も武士の妻でないか。立騒て見苦しい。一家中の上に立。諸事を取さばく大星宮内。いかに我子の敵なれば迎。子細を糺さず取計らひが成ふか。それでもお前。ハテサテ馬鹿な事を。去によつて最前兩人が勝負。コリヤ意趣討と見た故。悴ながらも餘所に見て。物音を鼓に紛らし。思ふ儘に勝負をとげさせしは。是全く武道の表。サア平吉。口論に及びし事の子細。此宮内聞届くれふず包ます申せ。ハイ。昨日八ツ上りに野川で。皆魚を漁ふておりましたに。民之丞様は魚が取ぬとおつしやつて腹を立て私が邪魔を致しましたによつて魚が取ぬ。今から此川へ來たら聞ぬと。様々悪口おつしやつて。私が此額を封算て打割。まだ其上に私が差しておりました一腰を抜て見て。竹光じやといふて手をたゝき。笑はれた時の面目なさ。其跡で竹光もへし折て私を踏打。モウ重々堪忍が成ませぬ故。お屋敷へ忍び込。切かけたのでござりまする。ム、昨日の時宜。先刻奥にて子供等より聞た通に違ひはない。潔白によく言たなア。民之丞様を殺し。所詮助からぬ私。此上のお情に

は。どふぞ親與一兵衛に。お咎のござりませぬ様に。私を御存分になされて下さりませと。地我子の立派に寺岡夫婦。喰しばつたる忍び泣。宮内つくく。平吉が。顔打ながめ。詞ム、民之丞様を手につけ。所詮助からぬ私が命。此上のお情には。親與一兵衛にお咎のない様に。私を御存分になされて下さいといは。年端も行ぬ形をして。ハテよく言た。よい。身が存分にする覺悟せよと。地いへ共ちつ共體せぬ平吉。命惜まぬ丈夫の魂。詞ヤア誰か有る。民之丞が死骸奥庭へ廻せ。ナニ戸ゆら。悴が敵目の前て一步様とくと見分。サア平吉。うせふと引立て。地ノフ是暫し御待ととどむる母親突退。平吉を引立て奥の。フシ一間に入れば戸ゆらもフシつゝいて立て行。地母は有にも有れぬ思ひ。奥を目がけて駈行を。首筋取て與一兵衛コリヤ待て女房。詞そちが未練を働くと。悴計か此與一兵衛迄が煩が立ぬわい。じやといふて。ヤア一合取ても武士の女房。未練なやつと呵られて。地三千世界を尋ても。詞眞一人となし可愛い子に。今が別れの時じや物。未練になふて何とせふ。地産落してから丸三年。夜の目も寝ずに育上。地智慧付程猶可愛増し。脊の延るを樂しみに。着せる着物の寸尺が。長ふ成程こつとらが。末が短ふなる命。壽命の事も思はずに。成人さしておのれやれ。この様こそ足輕なれ。人にすぐれて連の。立身さして見せふぞと。地思ふた事も水の泡悲しいはかない此成行。いかに武士の習ひじや迎。現在我子が手打に成を。不便な奴共只一言いふてもやらぬ無得心。三火か七火か灸さへ泣てわめいて外廻る。子供の常に引かへて親に難義のかゝらぬ様お願ひ申上ますと。立派にいふた弟が。目にちらちらと此胸が裂るはいのと伏沈めば。ヲ、道理々々と言たさも。こゝが辛抱。侍の性根々々と喰しばり。泣ぬ螢の身を焦す。フシ思ひ。はかなや無慙なり。地かゝるフシ歎の奥の方。エイとかけ聲。響く刀の鏗音に。狂氣の如くあれ。我子の最期悲しやと。騒ぐ女房を引すゆる。覺悟の夫も今更に何と詮方なき折節。あへなき骸を戸板に乗せ。金子の包取添て。近習が昇て持て出。詞ナニ與一兵衛。手打にしたる平吉が死骸。其儘に遣はす間取置けと有る主人の御意。早々もつて歸られよと。フシ言捨てこそ入跡に。地泣倒れ伏す母親が。死骸にひし

と抱付。地奥一兵衛目をしばたき。詞ハア、誠に後悔先に立すとやら。七年跡の抱瘡は。山も上らぬ重い大役。いつそ其時死だらば。今の思ひは有まいと。地敷けばお種も諸共に。詞コレ平吉。こんな事なら昨日野川で逢た時。わがみの其額の疵は。マアどふ仕やつたと問ふたらば。アノあの川の端で轉ましたと。隠してたもつた孝行が地今ではけつく恨めしいと我子の。フシ死骸に取付て。見れば見る程平吉ならず。詞コレこちの人。此死骸見やしやんせ。ナニ死骸がどふした何としたと。地立寄てよく／＼見れば。詞ヤアこりや平吉ならぬ民之丞殿。エ、と地驚く一間より。詞ホ、其子細宮内が申聞さんと。地障子押明立出る。始にかはる平吉が上下立派にしづ／＼と。フシ戸由良が手を引立出れば。顔見て恟り夫婦が仰天。詞宮内様。そちは平吉。ヤア／＼まだ生て居てたもつたかいのふ。コリヤ／＼兩人驚相言な。そち達が悴平吉は。身が手にかけて其死骸。エ、。是成は某が悴民之丞。今日只今より養育して。家に繼木を大星が。家名を咲す忠臣の孽。そんなら悴平吉を。コレ／＼大星宮内が世繼をとらへ我子とは。必鹿相言まいぞ。エ、そんならあなたも。ヲ、得心てなふてなるるか。親に難義のかゝらぬ様にと。心をすへた平吉が其立派さ。民之丞が不行跡あまふ育てた私が誤り。武藝馬藝は見向もせぬ不所存者と思ふても。畸人な子が可愛いと女は輪廻に迷へ共。平吉と民之丞は。瓦に黄金を替る道理。あの様な智慧の有る。地子を設けたと思へばの。こんな嬉しい事はないと。いそ／＼勇む奥方に。お種が嬉しさ手を合せ。詞エ、奥様の忝ない。お禮は詞に盡されませぬ。ヲ、誰有ふ宮内様。こつとら風情の悴をば。厭ひもなされずお家の跡目。何たる是は勿體ない。サイナア申し。地お志の有がたやと。手の舞フシ足の踏途なし。地奥方は差寄て。詞イヤ申し。あの子を民之丞と呼まするも。どふやら不所存者の名も否でござりまする。私が心に隔てぬ證據。どふぞ私が名の。戸由良と申すするを形取。名を付ておやりなされて下まりませ。ムウ成程尤の願ひ。其方が戸ゆらの文字を取り。戸ゆら戸ゆら由良之丞でも有るまい。イヤ申し。私を助けてくれませるといふ心で。由良之助とはどふでござりませふ。待やれ大星由良之助。ソレ申し。よい

名てござりますすぞへ。いかにもコリヤよかるふ。然らば今日より。大星由良之助義金と改め。鹽治家二代の忠臣。後年に及び名を萬天に輝かせよと。地英士を仕立たる宮内が器量。實に梅檀は双葉藏。末頼もしき若者なり。地寺岡ハツト頭を下。詞ハア親に増つた果報者。コリヤ女房名も改めてお付なされた。サイナ大星由良之助様とは。ほんに結構なお名てござりますするなど。地悦ぶ母親安堵の胸。宮内一間に打向ひ。詞ヤア／＼小三郎參れ。地ハツト答へて弟小三郎フシ一間より立出れば。地宮内夫婦に打向ひ。ナニ寺岡。汝が一子平吉が替り是成小三郎。妾腹ながらも身が悴。今日より汝に遣はす間平吉が替りと思ひ。コレ奥頼もしき寺岡へ。養子に成は彼が仕合。コリヤ最前奥にて申付た通り。とくと心得たか。ハイ。申しと様か。様。今から可愛がつて下さりませと。地心詞もしほらしき。生立見るよりぞく／＼小踊り。詞左様ならば此お子様を。ホ、今日より其方が跡目。則平吉が一字を取て寺岡平右衛門と改め。其人の後由良之助と心を合せ武名を上よ。ハツアハ、、、残る方なき御情。コレこちの人。平吉はあなたの御世繼。其上に此小三郎様を。私等夫婦の子にせよとは。エ、有がたうござります。ホ、ラ悴が落着事濟上は。家中の子息皆々。是へ。地ハツト答へて十松彌吉。フシ惣次郎喜三郎立出れば。詞ホ、ウ其方達も此後は。由良之助と因を結び。地若殿のお傳役。某が烏帽子親。詞先十松は矢間十太郎と改め。喜三郎は竹森喜多入。地惣次郎は原郷右衛門彌吉は則千崎彌五郎いづれも。武藝を勵まれよと。以前拾ひしフシ假名手本。地さつと廣げていかに方々。詞此いろはの手本は昨日野川にて。我手に入たる平吉が無念の血汐を、ぎし手本コレ。此地いろは四十七。上にならべし頭字に。心を留てよつく見よ。詞いの字の形は兎の錨形。一は則萬物の。始とフシ定めて是仁なり。地智はフシ萬代の寶にて。勇氣を兼て。フシ三徳兼備。要害堅固に城を守り。世を治むるを基とすれば。縦へ亂世近きに有共矢種兵糧貯へ積み。定堵をまふけて英氣を養ひ此。七文字の文字によつて四十。七騎に英士をすぐり。お家の大事にならんず時。速大功成すべしと。宮内がしめしに寺子共。皆一統に勇立。詞由良之助殿を頭と定め。地我々心を一致にして。若殿を守育。義

を金鐵に戦場の。御馬先にて高名し。名を萬天に輝かさん皆々何と進立れば宮内男の聲高く。詞ホ、、、未頼もしき若者共。地御家の柱石忠臣無二。鹽冶の家は萬々歳とフシ勇みに勇む悦びに。地憂事交る有爲轉變。あへなき骸を昇上る寺岡夫婦が手向の露。義理と情と母まゝの。有とは見へて隔なき四十。七字のいろは假名。双葉の末の末の世に。忠臣藏の礎と其名を。代々に響かせり

祇園の曙

地風が寢耳へふれて行。芝居の太鼓。朝稽古。彈三味線の。フシ祇園町。地由良大盡の行先を尋廻りて寺岡が。勞れて暫し一力の。用水桶を。邯鄲の夢驚かす。朝フシ嵐。地ふつと目覺しあたりを詠め。詞扱は今は夢で有たかハテナア。爰は所も祇園町夕から大星様を探し勞れて思はずも。此所に睡間に。まざく見しは本國伯州三十年の昔。由良之助様と此平右衛門が身の成立梅の木に櫻をつげば。やつぱり櫻の盛りを見せる。心がからこそ身は賤しけれハテ恥しい物だナア。

此所雪葉脱漏あり。

縄手

歌さまと夕べは誰と寝た。誰と知ぬ火筑紫の人よ。けふは越路のひな人も。こゝによるべの川東。流れのフシ里ぞ眠はしき。地縄手通りは櫛の齒を。引ずりの音ぐはらくと。仇口々のそり歌。歌アノ燭臺の蠟燭の流れの末が案じられ。詞ヤア栗餅しんこでござりますぞ。風味の宜しいのでございますぞ。サコレくくいと様ほん様お乳母様長吉様もふくりと。御覽じませ。コレお江戸は八百八丁町大傳馬町に小傳馬町。ソレこなたの山手は麹町。湯嶋淺草東

観山。イヤコレ／＼こちらを見なさい。永代橋に僧三人兩國橋に鑑三本。三芝居の歌舞妓矢檜座本は勘三きり長桐。ホシニヤレ／＼そふいふ心で有ふとは。歌知ず知れぬ中なれば。うかれまい物去逆は。詞ナント太兵衛。此川東は。近年花やかな事じやないか。サイヤイ由良大盡といふ奴が。ゑらふ祇園の力でさやしをるげな。此間も里げしきとやらいふ新歌を開いたといふ事じや。ヲ、そふじやげな。何でも法師が三十人。藝子はしかも玉計。お百におげんにばん長に三吾に入重野にお霜に小雪にお信にお周にお幸に。ア、コレ／＼。三十三間堂の佛の數程いふて居る間に。何ば長い夜でもつい更る。地更ぬ内にとぞめき共。フシ我家々々へ立歸る。地様子とくより來かゝつて。立聞兩人歩み出。詞九太夫様。出平。由良之助が今の噂。アリヤいつそ狂氣の汰沙。其方よりは迄の内通。よもやあの様に有ふとは思はなんだ。扱々々我もへんしも折果た。ハイ左様／＼。お前様のお頼み故。由良之助に取入辨慶に成り。そやし立ればたはけの有條。何でも京は一萬年も居る心と見へて。此間も室町の家賃の引合。傍で聞ておりましたが。いやもふ十方もない高利。あんな利で誰が相手に成物で。ハデ扱そふいふ馬鹿物故。お國でも儉約すればよい事かと。師直殿へ見もんとせず。とふ／＼大事を仕出した狼狽者。併そふ致すが。やはり方便やら相知ねば今一應。サアそふ思ふて此間の短刀。平右衛門めに。シイ。コリヤ爰は途中。萬事の手筈は力にて。そんなら九太夫様。出平。身に付てかふ來やれと。地欲と惡とをない交し。繩手通りを横切に。祇園町へと三重へ急ぎ行く。

一 力 表

歌色里は。夜の錦や四條通。妹背を結ぶ。フシ繩手筋。地おかるが母は稚子を。脊中においの足輕く。手を引娘は寺岡が。子よりも孫に目の見へぬ。目病の地蔵そんじよ其處と。芝居。フシ目當に。彳で。詞ノウ小岩。在所と違ふて花の都。賑やかな事じやないか。アレ／＼あれが祇園様と。地拜むこなたに。引ずりの音も。かろ／＼まはしが包。地お

かるも今は薄雲とかゝる憂身の掛行燈。火かげにちらと。詞かゝ様じやないかへ。ヲ、おかる。替る事もないか。ア
 イ。ヤコレ喜助殿。お前は八百くらの仲居衆に。今の事頼んで。一力へいて下さんせ。わしもそこへと。地人を除。
 詞マア／＼かゝ様。お前も御無事で。お嬉しうござんす。ヲ、無事は無事ながノウおかる。勘平殿との中の此子。生
 れ落るより二親の手を放れ。此ばゝがあつちこつちと貰ひ乳で。育上は上たれど。地又してはそなたを尋るいぢらし
 さ。言聞した迎頭はなし。詞兄の平右衛門は。由良之助様の影身に添て内へは戻らず。與一兵衛殿に引繼いてお北も死
 にやる。やせ百姓の悲しさ。地そなたに迄勤奉公さすと思や。詞ア、かゝ様。もふ／＼そんな事は案じずとよいはい
 な。ヲ、小岩。よふおじやつたの。ちつとの間見ぬ内。テモ大きふなつて。アイおは様。おなつかしうござります。マ、
 マ、かゝ様も辛度かる。ドレ三治郎こつちへおじやと。地抱取ふりは子持月。子持とさらに更科や。おば捨山衆の名月
 に。ふるは涙や薄雲の。フシ晴ぬ思ひぞわりなけれ。詞マア／＼久し振逢て嬉しい。わしはそんなら六條の旅宿へ行
 んで。あすの朝山崎へ往ぬる程に。小岩は跡からとゝと一所に戻してたもや。さらば。地／＼と母親は。三治抱取
 いそ／＼と。フシ六條さして別れ行。地女郎も買ず酒吞ず。忠義に通ふ祇園町。いきせき來かゝる平右衛門。夫と見る
 よりおかるでないか。詞ヲ、兄様。誰様じやと思ふて悔りした程にの。コレとゝ様。ヲ、娘か。ヤナニちとおかるに
 咄したい事も有れば。暫くそつちへ控へていろ。そんなら小岩。そなたは一力に待て居や。早ふ。地／＼と。フシ追追
 れば。地平右衛門傍を見廻し。詞シテ由良之助様は。今夜もやつぱり此一力に居續。一向たわいがなはいな。ホイ
 是非もない御身持だなア。頼みに思ふ由良之助様は。放埒情弱。夫故敵を討所存はないと。四十餘人の人をは一統に
 見限果れど。此平右衛門計は。あなた様に限り。よもや／＼。定て深い御所存が有べいと。毎日毎夜此様に。お跡を
 慕ひ。此年迄。東西わかたぬ遊所をあちこちと。さまよふ内に聞く噂。一つもろくな事はなく。地若や天魔の見入で
 は有るまいかと。食事さへ咽へ通らぬはいや。詞ヲ、いかい御苦勞なさるゝなア。其御咄しを聞に付け。地悲しい

は私が身の上。勘平殿に思ひ思はれや、迄もふけた申なれど。調艶書をこしらへ私をば。かほよ様じやと師直を。だませし故にお主の御難義。地せめては冥途の殿様へ。何卒お詫に一ツの功立よふの御思案を。頼むと計薄雲が。屋敷と里の二見潟。こほす涙の玉手箱。かけこが。フシなふて可愛らし。地折から。フシ來かゝる名うての悪者。泣事知ぬ目玉の出兵衛。歩み來る體目早き寺岡。目ませ仕かたで隠るゝ薄雲。跡につゞいて平右衛門。入んとするを。調コリヤ待て。儂マア太い。地奴じやと呼留られ。大の男も疵持足。土邊におづ。しよるげるに付入。調ヤイコリヤ泥坊め。儂が取込おつた刀は鹽治判官が切腹した刀。どふぞ五十兩ぐらいに賣てくれと。ナソレ刀をわれに預けたぞよ。夫からマア毎日々々催促すれど。酢の麹麹のと引張を付上る。大かた刀は賣て仕廻。金は宙でくすねたな。ア、コレ必鹿相いふまい左様な非道を構へ。今日の天理が濟ふか。成程。ケ様に延引成りまするも有やうは此刀。おらに所望させて貰ひたさ。ヤア。大きな事をまき出した。ガわれマア煩けたは裂やせぬかよ。サア定ならば今。金しよ。イヤ只今と申ては。ないか。くへ、くへ、くへ、何の有ろぞい。金がなくば。刀をせうか。サア夫はサア。サア。サア。くくくどふじやい。物ぬかせと。地賊飛され。詞成程金子調達致いて差上べい。逆もの事にナ。爰四五日。ならぬ。どふぞ爰四五日の事だ。ならぬ。サそこをどふぞ御了簡。エ、どびつこい置きやがれ。儂が金を拵へる間待根が有ればナ。弘法と張合て。彌勒の出世を待はいやい。エ、あたけたいなど。地髻髪。取て引寄捻付る。奇怪なりと思はずも。刀の柄に手をかける。調ヤア。くコリヤ何じや。くわりや是で切か。イヤ全く。イヤ。切心じやある。ヲ、こは。くそうらしいをひねくるは。切ても見よふと思ふか。コリヤ面白く。サア切れ。くく。サアお切。切なはれ。切らぬかやい。エ、張合のないアノ鼻たれめと。地尻引まくる鼻の先。すり付押付。フシ傍若無人。地此體見るより娘の小岩。中に分入コレ申し。調餘所の伯父様。マ、く、待て下さんせいな。コレと。さん。わしや何にも知ぬけれど。色里といふ物は。身を賣ば金が出来るといふ事。おば様の今の身の上で。よふ知て居まする。地わしが様な者でも。一生を賣て

など。金調へて此難義。助かつて下さんせと眞實眞身の親思ひ。ヲ。詞よく言た出かした〜と。地抱しめ〜。聲
 を上咽び。フシ入たる男泣。詞エ、やかましいはい。儕が何ぼとこぼへても。大佛の水鐵炮。ヤモ迎も届かぬ事じや。
 金といふては出来まい。よいは此めろめ賣てやつてこそ。ガそんなら彌親判合點か。サア夫はガ又夫がいやなりや
 其刀。地こつちへよこそと懷へ。つゝ込引出す。手先をじつと。詞スリヤどの様にいふても。ならぬはい。ホイ是
 非に及ばぬ。コリヤ娘そんなら此お人と連立て行てくれよ。アイそんならばゞ様によいふに。ヲ、合點だ〜。
 三治郎も明日から。守してやる者はなし無淋しかろ。泣やらぬ様に。ヲ、サよいはいや。い。おば様へも心得てヤ、
 最ふ〜何にも言な。堪らぬ〜。此胸が。裂る。地〜とはら〜涙。哀を餘所に引立る。呵責の鬼に引るゝ娘の
 三途川流れに。沈むうたかたの哀れ。なく〜引れ行。地跡にうつとり平右衛門。影見ゆる迄延上り。詞ア、可愛や
 なア。何辨へなき子心にも。親を大事と思へばこそ。差掛つたる今の難義。救ふてくれる志。過分なぞよ。随分達者
 に暮してくれいよ。地武士の米喰た平右衛門が。妹と云ひ娘迄。傾城遊女と成果るは。いか成過去の惡縁と。くどき立
 たる一人言。フシ理り。せめて哀なり。詞ア、モウ〜言まい〜。何の其。忠義の爲だ。遅かれ遠かれ捨る命。是を功に
 連判の。ヤレ音高しと。地止むる虛無僧。笠を覗いて。詞ヤアあなた様は。コリヤ姓名はいふに及ばぬテモ御無用

一 力 内

拍子問ましよ〜。問しやれ〜。お客に取ては。珍客失。客新客飛脚。仲居は〜。どう一番に弱るぞ。新造は
 〜。外科の得意か。藝子は〜。度々産ます。惡口いふまい。赤子は〜。ソレ詰つた赤子は〜。ボペン〜。詞ヲ
 ヲおかしそりや何じやいな。ハテ唐の赤子の泣聲じやはいハ、ハ、ハ、詰つた〜酒じや〜。手のなる方へ〜。
 とらまよ〜。九太鬼やまたい〜。とらまへて酒吞そ〜。コリヤとらまへた。ソレ銚子持て〜。ア、

コレ鹿相なあなたは此方のお客じやはいな。イヤ／＼苦しい／＼。めつたに知ぬ顔でもないて。ア、どふやら聞た様な聲じやが。聞た様なとはどふじやぞいやい。ア、知れた／＼。由良殿じやの。さらば面ない千鳥を取て御挨拶を。ア、御挨拶とは堅い奴／＼。そふ四角四面では持ぬぞ／＼。所を持る様に打くつろいで呑ふか／＼。呑もせい。由良め。斧め。コリヤ咄せるはい。ヤナニ由良殿。連中が有るか。ヤ連中とは。ハテ徒黨の人数が揃ひましたか。イヤサ三代相慰のお主の仇を。成程仇には存ぜぬ。鹽治殿が短氣を出して劍の舞をやられたらこそ。我々迄此様に歡樂を仕るじや。國に安穩ておつたらば。一生此様に緋縮緬の脚布の味をしらずに。死るでがなござらふと思へば。主人の大恩忘れぬ／＼。口に諸の不淨を言へ共心に諸の不淨を言す。大丈夫の魂ホ、連々。イヤ／＼大丈夫と言れて痛い腹切ふより。粹名を賣て和こい太股を自由にするが當世／＼。ホンニ最前から薄雲が見へぬ。何處へ行た／＼。薄雲様は癪が痛いといふて。エ、癪所か爰へ呼べ／＼。薄雲様／＼。由良様が呼てじやぞへ。地呼れて里のうき勤。薄雲といふ名に連て。契りは薄き勸平を。慕ふてつらき。胸の闇。詞ヲ、由良様こゝにないな。ヲツトサ、／＼、爰へ／＼。何と我等がお敵。美な物で有ふがな。イヤモウ美な段か／＼。水晶もはだし／＼。時に薄雲が持ぬ顔て。我等もどふやら陰氣に成た。サ、／＼、酒にせい／＼。ア、申し／＼由良様其様にあがつては。悪いと知つても是がやめらるゝ物か。サア親仁さそふか。ヲツト頂戴と會所めかふか。ハテ古いやつ。ドリヤお看／＼。ヤコリヤ。蛸でござるの。ハテ蛸は櫻煮人は武士。ハ、／＼、ハ、／＼、ハ、／＼。ヤコリヤ面白い。ア、併今日は十三日。鹽治殿の逮夜。精進するか。エ、愚痴なやつ。テモ古主の事。ハテ鹽治殿が蛸になりもしられまい。ム、成程。ヤ斯致さふと。地懷中より。一通取出し押披き。詞は見さつしやれ。伯州領分の内。濱地二千石相違なく宛行ふ者也。斧九太夫を。鹽治判官高貞判コリコヤレ身共が大事の身代なれ共。家國沒收の上は反古同前。是て此蛸コレ。斯と。地勿體なくも押包むを。驚く薄雲。大星は。ハテくつさめと鼻へこよりの。フシ手轉業。詞是て彼取も直さず鹽治殿が蛸になられた。ア

是を思へば勿體なふて捨られも致さぬ。そこて是を又。エ、斯致すと。地傍に有合大火鉢。其儘打込大惡無道。詞コレ由良殿。く。く。コレ由良殿。是を見さつしやれく。鹽治殿が火あぶりになられたはいへ、。見さつしやれ由良殿く。コレサ目を覺さつしやれ。ア、申し三日このかたの吞續。暫しは此儘御休息を夫もよふござりませふ。左様なら九太太盡様。座敷をかへて一献くもふ。サアお出なされませ。繁深山木の花のあたりに照されて一人くよく幾瀬の思ひ。詞兄様。妹御目はさめたか。イエく。またすやくと。ムウコレ申し由良之助様。申し由良之助様。ア、ざはくとまだお歸りなさらぬか。イヤく。寺岡平右衛門めてござりまする。此御刀は殿様の血汐をあやし給ひたる腹切刀。匹夫の手に落入ござりましたるを。潮賀取ましたれ共。私風情の手に觸るは勿體なし。サ、サ、イザお請取下さります。ア、コレく。不吉く。コレ此刀故にこそ。其様も我等も難義。まだ仕足いて祈るか。ヤレく。いすはしや穢れると。地あいそ投出し又ころり。フシたはいやくたいなかりける。地勿體なしと寺岡は。白洲へひらり一間より。竊ひ立聞弁九太夫。切戸の外には出兵衛がさし足。平右衛門は火星が。伏たる前にぐつと詰かけ。詞チエ、こなたはのふコレ此短刀を由良之助に與へ我鬱憤を晴させよとの御遺言よもや忘れはなされまい。毎夜々々の御遊興。何たる事だと恨んでも見たり。イヤく。深い御所存ならん。大事の御身と思ふ故そも山科へ御引越なされてより。今日迄餘所ながらの御供し。爰の門には立。あそこの軒にはつくりと御歸りを見届けねば。休んだ事はコレござりませぬはいのふ。ケ様にはがゆふ存じまするも。平右衛門め計は一方ならぬ内縁。卅年以前。川原におゐての意恨。兄民之丞殿をこなた様が切害有て。解死人に成べき所。助けて家の繼木となし。由良之助殿と名を改め。拙者めを平右衛門と改名有て。與一兵衛方へ養子に成たは一昔。此平右衛門以前の身で有ふなれば。大星の氏は穢さぬ物。徒黨の人数を采配して儕師直が白髮首。引提いて置ふかと心計ははやれ共。何をいふても足輕風情。輕いやつ故口走らふかと密事をおかくし下さるゝは。コレ餘まり曲がないと申物。コレく。申しく。エ、去連はお

心強い。餘まりむごい胴欲と。地蔵附をもみ上泣わめけど。ぐうぐうといらへなし。エ、是非もなしと。地寺岡は。覺悟極めて腰刀。拔手にするをヤア放せ。詞コレ兄様由良様は吞續たわいの有ふ筈はない。とつくり思案をいか様なア。段々とお心遣ひ。酒でも無理に參らずはお命も續くまい。醒ての上の一分別。妹來い歌へ身は萍のよるべなき里の勤の憂やつらや。詞コレサ由良殿。由良先生。親玉く。ア、醉ふたぞく。ア、此頃の酒びたしに。客の出てもしらぬ仲居めら。いかいたはけと。地吹きながら門の口。出るより取出す件の狀。掛行燈の跡や先。フシトは女の文。詞ハア何じや。一筆申上り。かたきム扱は敵。エ、敵役のかづら藤八様には合申さず立役に仕かへく。エ、らつちもない芝居事だ。由良之助殿こいつは男の文體。エ、彌來る十五日申堅め候件の一義。ム、先達て彼御添削の歌。ム、しめたぞく。エ、何々御添削の歌開き摺物二十枚御越法師様方藝子様がた。エ、何の事だ。エ、是は又小口は讀ぬア、病氣養生の願叶ひ近々何々近々有馬へ湯治仕候間何卒金子一步御貸下さるべく候料理人幸助エ、いまくしいと。地打捨く。又取出し。詞由良之助殿原郷右衛門。ヤこいつは物じやと懷中し。地出行斧が後影寝ながら見送る由良之助かけ出る。フシ寺岡尻引からげ出行をヤレ待てハア。ナ。ナ。イケ。ハア跡を慕ふて。三重へ追て行。俄雨にも濡の里。往來は絶ぬ橋の上。川原傳ひに九太夫が。跡に付添ふ蕪かぶり。詞ハイ。一錢やつて下さりませ。付な。地くくと取あへぬ。向ふて廻つて。詞九太夫待て。何そふ言ふ聲は足輕めと。地いふ間に打込平右衛門。さすがの九太夫身をかはし。抜合せたる双の光り。始終を窺ふ由良之助。夫共白双のはつし。非道の報い忠義の一心難なく切ふせ。フシとどめの刀。詞ヤレ平右衛門。此場で殺さば遊所の取沙汰。喰ひ醉た體にして。ナ。合點か。ハア。今こそ忠心見届けた。徒黨に加へ東の發足。ナニ連判に加へられんとな。ハ、ハ、ハ、ハ。ホ、悦びは理り。最前其方が持來りし短刀は似せ物。誠の刀人手に渡してよい物か。地様子は聞たと駈出る。目玉をはすに。フシさそくの寺岡。コリヤ平右衛門當座の褒美と投出す金。詞此金は。薄雲小岩が身の代金。エ、有難い。地フシ折からどや。仲居

共。詞由良様爰にかいな一へん尋ねた程にの。イヤサ近年の二日酔。餘まりつらさに酔まじし。川風に吹れて居るは
いのもふく酒は呑ぬく。サア、仲居ども送れく。歌いなば祇園の。朝嵐。森の小鳥可愛とおしやる。鴛や
れ先かた跡かた共。さつさ押せく。打通て。山科さして三重へ急ぎ行

早野村

地廻り庇に萱の屋根。葺傳へたる家の風。南を請て暖かな福祐の暮し一群に。二もなき糸圖三左衛門重義といふ郷土
有けるが。何くらから満る月。フシ闕る習ひか子息勘平。萬事限りの床に付虚勞の上にさし出る。癪は病の扁鵲
も。フシ命を救ふじもなし。地一家の使懸家の見舞。門外込合其中へ頼みませうと案内に。どふれと答へ地早枝。
詞イヤ身共は大星由良之助より参つたと。地狀箱渡せば受取て。入んとするを。詞ア、コレくお返事には及ばぬと
申付たれば。其儘置いて罷るぞと。地フシ歸るにすれ合来る奴。コレサ物さ問申すべし。勘平様は家體に寝まり召るか。
ハイ若旦那様は御病氣で御寝なつてござりまする。どなたからの御使。イヤ身共は矢間重太郎より参り申した。お
見やれ狀は四五本。儘に届けてくれべし連諸方より拙者が旦那へ。頼み参つたから渡し申すと。地言捨て。口早尻
早足早にフシ京道さして立歸る。地ヤレせはしやと。地共。溜りし書狀一ツに持這入る。病氣をそろく退く醫者
を。送出る。地嫁のお梅は手をつかへ。詞三左衛門御挨拶に出まする筈ではござりますれど。晝夜の看病に勞れ。先
程より休み居まする故。地少しの内御用捨をおなし成れて下さりませと。舅思ひの孝行は。フシ眞實見へて可愛らし。
詞コレハ御叮嚀。扱氣の毒なは御病體。思慮度に過たる心氣の衰へ。其上鬱積を兼ねればとかく難治の症と存ず
る。所詮全快は心元なふ見へまする。最早兩三日の中でござらふと。地落命追見功者の醫師を送りてフシしほれ居
る。地お梅が心汲取て。地共も力を付け。詞イヤ申し御寮人様。何ばふお醫者様があの方に言しやつても。方々への

お命乞いのちこひ。神佛かみほとけと親且那おんな。お前様の精力せうりきで。追付本腹おしづきほんはらなされませふと。地心詞ぢしんごもしほらしう。言れて胸むねへせきかくる涙なみだ見せじと。押包おしづきみ。地便ぢべんりない身を深切しんせつに言てもたせる心ざし。嬉うれしいぞや去やながら。詞元しげんわしは勘平様かんへい様とは徒弟しで同士どうし。今の父母ふぼといふは伯父様おぢ様伯母様おば様。早ふ二人ふたりに祝言しゅげんさせ。初孫はつまの顔かほが見たいとおつしやつたが。地ぢ。去年こぞの春はる伯母様おば様はお果はなされ。悲しいは勘平様かんへい様。詞殿様しでん様の凶事きょうじをお國くにへ告つんと。早打はやうちに此所こゝを通とほらしやんす折しも折し。伯母様おば様の御葬禮ごさいれいに行合いあしやんした其甲斐かひも。地亡骸ぢなきがにさへ逢あれぬとは。ほんにく侍さむらいの身みの上程うへほど。あぢきない物はないはいのふ。詞夫しふから御家中ごうちゆうもちりくくと成な。お歸かへり有あしは氣きの毒どくなやら嬉うれしいやら。地悦ぢえつぶ間まもないアノ御病氣ごびやうき。もしもの事が有あたなら。わしや何なんとせうどふせうと。おろく涙なみだ。共ども。お道理様お道理様やと一同いどうに。汲取くみ涙花なみだばなの雨時間はれときも更に。フシなかりけり。地折ぢやから病家びやがに手てをたき。お梅おふしくと呼聲よこなに。詞しアレ勘平様かんへい様のお目めが覺さめた。我身われみ達たちはお藥いしやだてを。早ふ。地くと言付いふやり。ドレお脊中せなかつをさすらふと。フシ氣輕きがるに立て入いにけり。地人ぢにんなき隙ひまを窺うかがひて立戻たふもどつたる醫者いしやだて道鏡みちきやう。あたりを見廻みまわし。フシ立たどまり。詞伴しばん内様うち様の内意うちいによつて。勘平かんへいが様子ようすを窺うかがひ見れば最早脈みやくは上あつて有あれど。どふやら様子ようすの氣きぶざいなは。最前さいぜん來た數通かずとほの狀さう。とつくりと見届け注進しゆしん仕たら。何でも御褒美ごほうび仕てこいと。地欲惡無道よくあくむどうの鵬眼ほうがん。光ひかる白露しらつゆ。露前つゆぜん裁さいの繁しげみへこそは忍しのび入いる。地誠ぢまことの書ふみにも違ちがふ退去たいそは。地縁薄雲えんはくうんの我名われなさへうしと引ひるゝ稚子ななこに見せたや見たや妻鳥つまどりの啼慕なみだふてはるくくと。たどりて爰こゝに來て見れば。地美々みづみづ敷構しきかまへ氣後きごれし。イむ軒のきに降ふかゝる。時雨ときぐれはよいしほざし窺うかがひ。詞俄しごの雨あめに難義なんぎ致しまする旅たびの者もの。大事だいじなくば暫しばしの舍やどり。地御赦ごじやされてと詞付しづけしう有あねば。フシ呼よ入いて。詞よもや女中にようぢゆうのお一人ひとりでは有あまい。定きまめてお連つもござんせう。イエく連つと申まをしたら此稚子こゝななこ。辨わへなき者を頼たのみに。知しぬ長路ながちを迷まよひまする。ム、ハテナ。見れば美しい染絹そめぬいに包つつんで有あるは。三味線さんまいせんの様ように見みへますが。長ながの旅たびにはそぐはぬ物ものを持もてござんすな。成程なりほど御不審ごふしんは御尤ごよし。こりや大切な人の篋けつ。どうぞ此主こゝに逢あいたい見みたい計はかりに。はるくくと參まゐりました者ものでござります。今いまて思おもへば此三味線さんまいせんの模樣ようばうが氣きがゝり。尤互たがひの合點がてんにて飽あぬ別わかれはしたけれど。地思ぢおも

ひ切ぬは女子の常。忘れ安いは男氣の早秋風と色かはる。紅葉の蔭繪すれ落し。身のはかなさは唱歌にも。言れませぬと涙ぐむ。扱は噂の薄雲と悟れどわざと何氣なふ。イヤもふ聞ぬ先から。哀らしうて面白そうな事。幸ひ徒然の折と云ひ。お前は旅の憂晴し。其咄しを歌に寄。彈て聞して下さんせと。地望むは夫に聞せたさ見せもし見もしさせたさに。明る障子の打臥て瘦衰へし顔かたち。ノウなつかしや傷はしや其いたはりと知ぬ身の。うさもつらさも打明し。言たい事の數々は。人目の關にせかれても。留らぬ物は涙にてむせ返りてぞ。泣居たる。詞サア／＼旅の女中様。御寮人様のお望を。早ふ／＼地と女共。そゝるは浮氣。憂目をば。三筋の糸の音を忍び。詞語るに付て悲しきは。コレ稚子の身の上でござりますはいな。歌父は播磨の何某連。人に知れし武士よ。母は都の女郎の果。此子をまふけ育しが。詞過にし春の末つかた。我に此子を預け置。いたはしやな。此おさあいは。父よ。／＼と戀憧れ。詞ヲ、／＼目が覺たか可愛や／＼。コレ乳／＼と含めても。爺たい／＼。アレ／＼／＼あの様に言暮し。夜明の鳥と諸共に。まどろみもせず泣明す。餘り見るめが悲しさに。來にくい所へ連て來た心を不便と思召し。御寮人様お取なしお願ひ申上ますと。隠し包みし薄雲の。晴て親子の名乗合。お慈悲／＼とかき。フシくとき只伏し沈む計なり。詞ヲ、お道理じや尤でござります／＼。コレ申しお國からお供した者共の噂に聞たお二人の中。私に遠慮遊ばさずと。どふぞ親しいお詞を。かはして進せて下さりませ。アレ／＼あのいたいたいな愛盛り。地顔が見たふはない事かと。いへど答へず勘平は。瞬しげく數通の書面。フシくり返し見て火鉢に投。フシ火中のじやうとなす計。詞エ、餘まりな思ひ切。お前はお見捨なされても。此梅はよふ見捨ませぬ。必ず氣遣ひさしやんすな。其子はわしが育ると。地抱き取んとする所を。ヤレ聊爾なり控へよと。刀引提三左衛門つか／＼と歩み出。詞我子の武道に障礙をなせし。魔王といふは夫なる賣女め。高の師直仇と成たる其起りは。其女をかほよ御前に仕立。偽り欺せし故にこそ。鹽治殿につらく當りしを償ひ。殿中にて刃傷に及び。切腹召れし根を探らば。其女めより起りし事。討放す共何の事かは。ア、年寄て武邊

も氣丈も衰へたるが儼らが仕合せぞと。地父の怒りは勘平が。肝に砭さし切る障子。はたと轉びて聲を上げ。詞い
つそ死たい殺してほしい。御機嫌直る事ならば何の命が惜からふ。地其代りには此ぼんを孫よといふて下さりませ。
コレ拜みますお情でござりますはいなア、詞エ、と様お心強い。母御は兎も有れアレあの子は。現在あなた
の。ヤア孫杯とは慮外至極。不義なる中に生れし小助。我屋敷の土も踏すべきか。早く立去れ。行おらふと。地言へ
どたゝまく鶯鶯の陸に。迷ひし心地して。フシいと見る目もいぢらしき。詞ハテ扱出よといふにしぶとき奴。イデ引
立んとずんど立。地裾に縋つて。詞マア、待て下さりませ。お心に入ぬ事ならばもお願ひ申ませぬ。がせめて一
夜か二夜さを。ヤア 地面倒なと振放し。庭にかけおり袴がみ取。情用捨もあけなく外面にがばと突出せば。地わ
つと子も泣親も泣。道理は何ぼ道理でも。孫は子よりも可愛いと。言には違ふ親御様。餘まり難面胴欲と。恨かこち
てさめくくと。フシ身もだへしてぞ歎きける。地三左衛門聞耳立。詞アレ表に小兒の泣聲は。エ、聞へた捨子じやな。
適人間と生れし者。畜類などに喰はせんは無益の殺生。お梅拾ふてやらふかい。エ、そんならあの子を捨子にして。
ヘテ父母も知ぬ孤子。養育すれば迎誰點の打人が有ふ。ソレ早く拾ふてやりめされと。地思ひ掛なき照降の。かはら
ぬ内にと心も空。詞薄雲様も嬉しかる。夢ではないかと思はるゝと。地しほれし梅も胸ひらき。肌に稚子抱取て。歌ね
んくねんねこせい。ねんねが守も入そうな。事ではないかと目交する。詞ハイ。申し次手に私もあの
お子の。乳母に抱へて下さりませ。心がゆりたか乳のはり。早ふ上たふござります。ム、ハ、ハ、ハ、ぬかりもない自由
な世界。子を拾つたれば早乳母迄が調ふた。成程次手に抱へてやらふ。コリヤお梅其小兒連れて来い。ドリヤ。扱
よい器量。目付口元鼻筋迄。よく似をつたな。何じや祖父といふか。ヲ、くけなやつよく言つた。地堅い親
父のむず折は。朽木の梢に芽はへせし。苔の花と見るぶさを。フシ撫つ按りつ餘念なく。詞コリヤ誰が子寶。あなた
のじや。お前のじや。地二人が中のお手車。廻る廊下の奥座敷。祖父も シフうかれて付添行。地無愁やな勘平は。君

父の恩を身一ツに受てぞ重き病ふの床。漸に起直り。詞法眼の配劑的中せしか。體積の痛みも忘れし此元氣。我達も
 應看病に勞れたて有ふ。勝手へ廻り休息せい早く立よと人を拂ひ。地死病にせまる今月今日。大星殿も御發足と。傍
 輩よりしらせの文通。詞たとひ親子兄弟たり共。洩すまじと誓紙の血判。此事兼て親人へ仕官と言立。暇を願へど承
 引なく所詮忠孝全くは行はれぬ身の不運。忠には親をも捨るが習ひ。此儘告す打立んと。地枕の刀杖となし。立上れ
 共。フシ踏ためず。どうと轉びつ這廻り。心計ははやれ共身體自由ならばこそ。詞エ、淺ましや。筋骨一度に碎くる如
 く。一足だにも引れぬ苦痛。さあれば迪斯迄も思ひ込たる我存念。やはか晴さて置べきかと。地又立上れどせき登す。
 虚熱にくらむ眼を見開き。詞エ、いかに天數盡れば迎。節義を立る際となり。助りがたき此業病。地神も佛もケ程迄
 見放し給ふか口惜やと。無念の涙はら／＼。面に流るゝ發汗の。あせれば氣力もいと／＼猶。次第／＼に弱り果今
 を限りと見へければ。詞へ、ア是非もなや。逆も全快叶はずば。むさ／＼病に死んより。深く腹切て。師直を欺さし。
 艶書の誤りを償ひ。一ツには又亡君の御跡慕ふ殉死ぞと。地思ひ極めて腰刀腹に突立引廻し。既に切行息の緒も糸に
 よるてふ武士の。フシ物の哀やとどむらん。地斯とは知ていそ／＼と。フシお梅は夫に稚子を。見せる次手に。詞薄雲
 様。久し振て傍へ行しやんしたら。ぼんより先へ抱れたからふ。ア、じやら／＼と何おつしやる。地あんまり粹な奥
 様で。けつくどふやら氣が張やうな。詞ヲ、何の斟酌サアお出と。何心なく唐紙を。あけに伏たる其有様。二人は二
 目と見もやらずわつとたまざり泣出す聲。耳にこたへて三左衛門。遣戸突明かけり出。なむ三寶と仰天し。フシ慌れ果
 たる其所へ。地下部一人罷出。詞大星由良の助様御入來なりと取次す。ナニ大星氏の參らしとな。ヤイ兩人の女共聲立
 てさげしまるゝか。ほへな泣なと。地阿り付横引立出向ふ。地光りを隠す明鏡のうらむらくは戰國に。顯はれざる此
 一人。フシ案内に通て打通り。地互に禮讓席を定め。詞暫く面會申さねど。筋が病氣度々御尋ねの使者に預る事。淺か
 らぬ懇志と。地挨拶すれば由良之助。やゝ顔色を打守り。詞山根より額にかゝり愁ひの白氣顯はれしは。是正しく死

別の相。推量りし事ながら。保養叶はず子息勘平。死去召れしと覺へたり。残念さよと賢察に。三左衛門横手を打。成程只今自殺仕つた。ナニ生害召れしとな。シテ其趣意は何と。イヤ其趣意は早野勘平。直々言上仕らんと。地はつと燃立陰火に連。忽然として庭前に。影の如くに。顯はす姿。大星驚き打見やり。閨閣浮に沈む身を以て。遺書に宿意を残すべきに。我に直く告んとは。扱は誓紙の掟を守り。父にも大事は包まれしな。ハツ去故にこそ勘平が身體せまる身の不運。只何となく親人に仕官の望有と言立。暇を願へど承引なく。行ば不孝留れば不忠。二ツの道に苦しめど。忠義に孝はかへ難く。各方と一統に是非鎌倉へ御供と。心計は早れ共。一足だにも引れぬ業病。けふ發足の數にもれ。埋木となる口惜さ。双に此身を切あばき。身は死しても一念は。東の御供仕り。本懐遂いで置べきかと。地無念貫く身の懺悔。胸にひつしと三左衛門。こたへる後悔こたへ兼。立聞二人は轉び出はつと計に取亂す。詞ヤア見苦しい。大星殿のお入の席。未練至極と呵るを制し。さな言れそ三左衛門。此期に及び何遠慮。ありく姿を顯はす勘平。親子夫婦の暇乞。とくと對面遂られよ。ハツ有難きお赦しなれ共。一世に限る縁やらん。拙者が眼には。イエく。現在二世の我夫と。定る私もわたしにも。なぜ此の子にもしくと。佛見せては下さんせぬ。イ、ヤ對面叶はぬ。本意も遂ずやみくと。非業に死したる此勘平。亡君の思し召憚り有恐れ有。黄泉の障りは勘三治郎。東の御供お赦し有らば。影身に付添亡君の。宿意を晴さん我願ひ。偏に頼み奉ると。地思ひ入たる義心の程。由良之助感じ入り。詞ホ、ウ出かされたり。其一心を頭に照し。四十餘人が鑑とし。彼地の働きなす功。今日より其勲。早野勘平光興と名乗らせ。義臣の列に差加へ。大星後見たすべしと。地受合詞は是正に。生ての加増百萬石。死しては千僧萬僧の。供養に増る恩徳ぞと。悦びの聲諸共に。姿は冥々朦々と。フシかき消す如く失にけり。地悲歎の涙大星は。三左衛門に打向ひ。詞恩愛の別れに一滴の涙さへ催ふされぬは。大丈夫と申すべきなれ共。夫は餘まりなる御憤み。返つて未練に見へ申す。イヤモ最前より英雄の手前を恥。袖には中々落さねど。心にたぎる老が涙。御

推量下されい。ハテいらざる御遠慮。スリヤお赦し下されふや。エ、地、忝なやと取亂し。詞エ、聞へぬぞよ恨めしい。
 なぜ打明てくれなんだ。斯る由々しき企と。露聊知るならば。悦び進んで見立ふ物。跡先の辨へなく。呵り怒つ
 てとどめたが。悔しいわい。残り多いわい。地左程磨きし魂を。土くれ瓦と捨てた。愚痴頭な此親には。生
 れ増つた嗚呼のやつ。詞身は死しても魂魄は筋に付添存念を達せんとは。ヲ、出かいだ。速と。地いふ聲咽にむせ返
 れば。お梅はいつそ正體なく。詞お聲を聞ねばなま中に。是程悲しう有るまい物。地いかにお主へ言譯。たつた一
 目お姿を。見せたといふても何のまあ。よもお咎は有るまい物。地斯言事とは露しらず。と、様やか、様のお赦し受
 て夫婦じやと。詞に結ぶ下紐も解しない程日を數へ。待た甲斐ない此しだら。心を推して下さんせ。詞ヲ、道理
 でござります。私も丁と一年を。地隔憧れて漸々と。今來て今の憂別れ。こんなはかない有様を。何の此子に見せう
 迎連て來たのじやない物を。斯いふつらさが餘所外に又有事かお梅様。詞サイナア申し薄雲様。殿御に放れる身の因
 果。子を先立る親の業。果報拙ひ此孫めが。生先思へば不便やと。地三人が歎き大星が。汲取る涙俱涙。涙々は津の
 國に名に負ふ昆陽の。池水に。フシ五月雨増る風情なり。地歎きの中に稚子は。大星に打向ひ。詞伯父様。鎌倉へ行し
 やるなら。此勘平も行ます。速て往て下されやと。地今迄頑是泣稚子。打てかへたる有様に。驚く人々由良之助。
 詞死靈の付添ふ此勘尤かうこそ有るべけれ。猶も様子をためし見んと。地一腰あたへコリヤ、勘平。詞發足の手始
 は何とくと間かくれば。ヲ、師直が白髪首。地眞此様にとずんと立。松が枝丁と切折れば。忍びし道鐵眞逆様。落
 るを透さず稚子が。フシ打て捨たるふしきの働き。詞ホ、ウ其いさほしこそ幽冥より。此世へ貫く忠心の。是ぞ誠に一
 番鑑。出來た。約諾なれば此稚子。是より召通同道せん。二人の女も付添ふて下るが夫へ追善供養。地用意く
 と大星が。フシ情の詞に三左衛門。飛しさつて三拜し。詞ハ、忝き御計らひ。勉めが存念を。立させ給はる御厚
 恩。何を以てか謝すべきと。地悦び。フシ涙ぞ道理なる。地折からかしこに鐘の聲。早發足の刻限と。由良之助の迎ひ

として入來る諸士に同伴と。つゝ立大星老人に。さらば〜と暇乞。二人の女も隨ひて稚子背にかい〜數。出行東の首途に。目にこそ見へねあり〜と。付添死靈の一念はあはれ。すざまし 三度定めなき。

道行春の富士

春花鳥の。色香艶しき春の日も。けふの現はあすの夢。昨日は今日の フシ夢となる。光陰早野。勘平に。フシ縁薄雲が憂事の。地忘れ簾の三治郎を。地四十餘人の其數に願ひ叶へば親も子も仕合せよしの脊に乗て。お梅が。手綱ひく駒の。あしの津の國跡に見て。東路さしてたどり行。フシ空も霞みて。うらゝかに。柳の。目元しほらしく。梅にほしの散し雪封じる フシ儘に受取て。フシ空行雁も。臆にて。夫と都も程過て鳩の。海づら。吹すさむ。風に胡蝶のひら〜と。あなたに浮れこなたに。狂ひ。花有木にもひら〜。花なき草にも。ひらりひら〜扇の。しもと。うつらふ花の。二人の女。裔ほら〜。しどけなく。戯れ遊ぶ稚子を連て。過行鈴鹿越。心も關や角文字の。伊勢路尾張路三河路を過行旅は同じ道。同じ フシ鹽治の義士達も東下りの フシ忍び路を。地お梅が見付てあれ〜。アノ山伏や獅子舞は。千崎様や竹森様。ほんに跡なほ十太郎様。ヲ、イ。地〜と招かれて。やつす姿のとり〜に。渡り急ぎし越後獅子。夢の占越後の。獅子は牡丹持など。富貴はおのが。姿に咲せ舞納む。姿に咲せ フシ舞納む。地拟其次は千崎が。詞ヤレ〜 哀はかなき早野勘平が身なる果をな。聞ば聞程無慙と言ふか。大星殿のナ一味に加はり。神文誓紙の堅い約束。親にかくして東の旅立。願ふも忠義と元より知ねば。親は片意地中々赦さず。明せば諸士への言譯立ねば。殆困つて切腹したとは。悲しいはかない。哀なこつたよホウ。地せめて。詞〜其子に手柄をさすがナ。草葉の陰への追善供養よ。おいらもとも〜力を添べい。擬〜。コリヤ又どふした。哀なこつたよさらば〜と 地傍華の。フシ情を餘所に言教へ。地行く人々のいさましい。忠義の先証見るに付け。

亡我夫も世に有らば同じ東の旅はゞき。いとけない子を双方が。夫よ夫よと慍氣も。したり。妬まれた。昔がましと夕霜の。おく底もなふ打解しうき身は悲しい此わたし。嫁といふのは名計で。白齒も染ず。袖とめず。殿御の肌は。どんなやら憎い可愛の譯しらず死て未來の行先は賽の。河原へ行まする。イ、エイナ。お梅様。私はお前が浦山しい。假の契りをなま中に。かはしてけつく増す輪廻。抱て寢る程罪深ふ。得忘れぬのが女の因果、推量してと諸共に。絞る袂の雨露に草 フシ葉も。浸す計なり。フシ三人が哀。汲やらん空かき曇りさら／＼。さつと催す。春雨に。濡まじ物と笠取り／＼木影をさして 三重行空の。ふりみ降らずみ定めなき。旅は色々うきが中。あなたの松陰花やかに。臺笠たて笠大鳥毛。行列揃へてぼつ立る。武門の驥をあり／＼と。三保の松原氣色よく富士も。昨日に見かはして。け高く見せる佛を。うつすや田子の浦人の。聲面白く一同に。歌富士の。白雪。朝日て解る。娘嶋田は寢て解く帶の。しんから底から戀にや夜も日も。明ぬ物じやとナ。サアサ可愛さが増はいな。梅の。苔と。戀しの文は。ひらく間を待兼山の。眞實誓文色にやうき身を。つくす物じやとナ。サアサ可愛さが増はいな。諷ひ連たる友鳥。塹に歸る夕闇の空に輝く星月夜鎌倉。さして 三重

師直屋敷裏門

地實に松柏の年寒く操屈せぬ寺岡が。忠義に略す焼鳥の。身過渡世にあだ浪の。夜る／＼。窺ふ師直が。フシ裏門口に立留り。詞亦是は大分雪がちら付て來たはい。ヲ、寒む／＼。是は又寒い事では有るぞ。誠に今日は極月十二日。此鎌倉へ來て最ふ二ヶ月。今宵も大かた九ツ過ぎ。焼鳥／＼。御存じの味い物屋でござります。焼鳥／＼。モウ家中は寢たか。マア今宵も氣遣ひはない。ドリヤ逝ふかと。地提手桶。フシ提まい物屋でござります。焼鳥／＼。モウ家中は寢たか。マア今宵も氣遣ひはない。ドリヤ逝ふかと。地提手桶。フシ提まい向ふへ行過る。地後の方に聲有て。詞義政／＼と。地いふに寺岡胸にぎつくり。つか／＼と立寄て。詞ムウ我本名

を呼は。寺岡平右衛門身共じやはい。ヤア大星様。コリヤ。此屋敷の邊り。斯の如く非人と迄姿をやつし徘徊するも。ハ、ア拙者連も商人と成。晝は勿論夜に入ては心元なく。商ひに事寄。家中の寢入迄は。ホ、ウ出かした平右衛門。嚴多素雪も厭はぬ忠節無亡君にも御満足。ア、イヤ私よりはお前様。道中の勞れもお厭ひ遊ばされず。非人と迄お姿を。サ是も冥途へ御奉公。斯計心を盡すも。無念懺たる我々が魂。亡君の仇一刻も早く。サ首かき切つて恨みを晴さん。今日は十二日。来る十四日には御菩提所光明寺にて參會遂げ。サ其夜の密事を。シテ。お手當の荷物萬事は。サ追々到着。此義は其方へ申付る。着船次第諸士の旅宿へ。ハア畏り入ました。其方に對面逢て我も安堵。最早旅宿へ立歸らん。其方も早く。ハア。ガ夜も更ましたればお旅宿迄お見送り。イヤ。夫は無用。じやと申して。本望達する迄は御大切な大星様。何さ。忠義に重い輕いはいないサ。そち連も同じ身分早く歸つて休息仕やれ。デモ。ハテ扱。師直が首見る迄は某が身は金鐵。氣遣ひ仕やるな。ハア左様ならば。地さらばと計大星は。フシ旅宿をさして立歸る。地跡打見やり平右衛門。調ア、いかい御苦勞遊ばすなア。地と思はず涙はら。と。汲取跡に疾よりも。忍び立聞門番が。曲者やらぬと腰刀。抜てかゝるを引廻し。刀たくつて其儘に。脇腹くつとどめの刀。フシ脆くも息は絶にけり。地用心厳しき。門内の間近く響く柝に。傍り見廻し。詞焼鳥や焼鳥。夜半に。地紛れて。三重入立歸る

勢ぞろへ

地柔能く剛を制し弱能く強を制するとは。張良が石公に傳へし秘法なり。鹽治判官高定の家臣。大星由良之助是を守つて。既に一味の勇士四十餘騎獵船に取乗て。苦深々と稻村が崎の油斷を願にて。フシ岸の岩根に潛寄て。地先づ一番に打上るは。大星由良之助義金。二番目は原郷右衛門。第三番目は大星力彌。跡に續て竹森喜多八片山源太。

先手跡船段々に列を亂さず立出る。奥山孫七須田五郎。着たる羽織の合印。いろはに フシはへと立並ぶ。地勝田早見遠の森。音に聞へし片山源五。大鷲文吾かけ矢の大槌引さげく。詞吉田岡崎ちりぬるをわか手は小寺立川甚兵衛。不破前原深川彌次郎。得たる半弓手挟んで。上るは川瀬忠太夫 フシ空に輝く。大星瀬平。よたれ。そつねならむ。あの。奥村岡野小寺が嫡子。中村矢嶋牧平賀。やまけふこえて。朝霧の フシ立ならびたる蘆野や菅野。詞千葉に村松村橋傳治。鹽田赤根は長刀構へ。中にも磯川十文字。遠松杉野三村の次郎。木村は用意の懸梯子。千崎彌五郎堀井の彌惣。同じく彌九郎遊所の遊びにゑひもせぬ。由良之助が智略にて八尺計の大竹に。弦をかけてぞ持たりける。後陣は矢間十太郎遙跡より寺岡が。伴ふ二代の早野勘平。假名實名袖印 フシ其數四十七人なり。地鎖袴に黒羽織忠義の胸當打揃ふ。實に忠臣の假名手本。義心の手本義平が家名。天と川との合詞忘るな兼ての言合せ。矢間千崎小寺の面々。斂力彌を始とし表門より入れく。郷右衛門と某は裏門より込入て。地相圖の笛を吹ならば時分はよしと乗込よ。取べき首は只一ツと。由良之助に下知せられ。怒りの眼一時に。館をはるかに睨み付義と。表へ別れ行。

敵 討

地既に其夜もしんく。闇に一ばい黒どり奴。挑灯引提いつきせき。來かゝる跡より寺岡が。付るとしらず師直が。表の フシ門口打たけは。内より答へる寝ぼれ聲。どなたでござる。薬師寺次郎左衛門家來旦那のお迎ひ門をお開き下さりませう。是は御苦勞と。地言後より挑灯ばつたり眞の當。うんと其儘息たへたり。物音聞付門番が。狼藉者と立かゝるを。心得たりと平右衛門。引かづいてどうど投付。縛り フシからむる其所へ諸士ばら／＼と立出て。詞首尾は。シイこいつに手引させ。いづれもお入なされ。出來た。地く一同に門内さして 三重へ忍び入る。地大星が軍慮の如く関を作つて攻入ば。寢耳に水の一家中。あはてふためき 三重へ外惑ふ。地北隣は仁木播磨守。南隣は

石堂右馬之丞。兩隣より何事かと。屋敷の屋根に侍共。挑灯高くさし上て。詞ヤア／＼お屋敷騒動の聲。太刀音矢叫び事騒しく狼藉者か。盜賊か御加勢致せよと主人右馬之丞主人播摩守申付ましてござる。イヤ我々は鹽冶判官が家來の者共。主君の仇を報はん爲四十餘人の者共今宵夜討に推參致した。御隣家に恨もござらず火の用心萬端凶事はござりませぬ併御加勢とござらば是非に及ばず。一矢仕りませふかな御神妙／＼主人へ此由申達しませふ挑灯引けと一時に鎖り返つて控へける。一時計の戦ひに寄手は纔二三人。薄手負たる計にて敵の手負は數知れず。忠義の刃鐵に切立られ皆ちり／＼と逸失たり。あなたの庭より二代の勘平薬師寺と切結び秘術を盡す奇代の働き死靈の力添るとは知らぬ薬師寺侮つて刀からりと打落され。南無三寶と逸行を。飛かゝつて大袈裟切に打放し勇進んで駈り行。寢所の内には師直が胸に覺の絶體絶命様子猶豫ふ其所へ命から／＼伴内が。詞申し／＼御前様／＼。コリヤどふしませう／＼／＼フシおど／＼震ひ居たりける詞サアよいてや／＼。じやと申して是が落付て居られませうかよいてや。コリヤはへ參れ。ハア。參れと言ふに。ハアと。地さし同伴内が。袷かみ擱んで／＼と引寄。首かき切て傍に投捨。詞生置ては眼前の妨け此上は片時も早く。そふじや。／＼と一人笑。兼てしつらふ二重壁袋棚へと忍び入る斯共知らず一味の義士次第／＼に込入て拔足差足窺ひ見て。天川シテ師直が寢所はな即ち此二間それと皆々寢所へかけ上りヤア師直は最早逸延たか。イヤ／＼何れも。一腰も是に有。殊に夜着蒲團の暖まり。此寒夜にさめざるは。逸て間なしと覺たり今一應御吟味御尤と猶奥深く尋ね行。空物凄き夜嵐に連て降來る大雪を押分ち柴部屋より。ぬつと出たる大男威有て猛き其骨柄夫と見るより一味の諸士。扱こそ師直ござんなれと左右より追取巻。打てかゝれば拔合せ。フシ爰をせんどゝ戦ひしが。地義を金鐵の刃先には。何かは以てたまるべき。フシ其まゝ息は絶にけり。地引起しとつくと見れば。詞エ、こいつ隣者だそふな。馬鹿／＼しいと一同に。地打笑ふたる其所へ。馳集つたる諸士の面々。詞座敷のくま／＼尋廻れど師直らしき者もをりませぬ。スリヤ取逃せしな。師直を討取んと年月心を碎きしも。やみ／＼と打洩せしか。エ、口惜

や。最早運盡たる我々なれば此所にて切腹仕らん。誠にいざと。地銘々が差添に手をかくれど。いつかな鯉口動かばこそ。コハくふしぎと軋れ入る。後にありく勘平が死靈を夫と大星聲かけ。詞ヤレ早まるまい。勘平が幽魂切腹をとめしは。師直いまだ屋敷の中に屈み居るに極まつたり。いづれもソレ。ハア。地はつと計に打連て奥座敷へと三重へ駈り行。地幾間數隔てくし奥座敷。あかりを照す蠟燭に蠟の滴出る所もなし。斯て大星由良之助。原郷右衛門。其外の義士の銘々。フシ追々に馳集り。地座敷のくまぐ見渡せば。壁にさしたる蠟燭のおのれと動くに大星は脇目もふらずきつと眼を付。詞ハテ怪しや。今は寒夜の時節。此壁の暖まりと云ひ。此蠟燭自然と動くは。何にもせよ二重壁と。地聞より力彌は飛掛り。錯引しごいてつゝ込ばしたる血汐。扱こそく。平右衛門打碎け。ハツ。地と答へて勢ひ込かけ矢をもつて打碎け。顯はれ出たる高の師直。皆飛掛るを大星制し。禮義を正し打向ひ。詞我々は鹽治が家臣。斯御館へ亂入せしも亡君の仇を報せん爲。速かに御首を給はるべしと。地兩手を突き。謹んで述べければ。師直ちつとも惡びれず。詞ヲ、神妙く。汝等が忠義に免じ。某が首を只今得させんと。地透を窺ひ抜討に。大星目がけて切付るを。かい屈つて腕首をしつかと取らへ。詞ホ、しほらしき御手向ひ。サアいづれも。日頃の憤憤此時と。地由良之助が初太刀にて四十餘人が靡々に浮木に逢へる首題は是。三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと。ずだずだに切付く。踊上り飛上り。フシ悦び涙に暮居たる。地由良之助は亡君の腹切刀取出し。師直が首掻切。詞是より直に御菩提所光明寺へ立越て。御墓に首を備へんと。地打連立か弓取の。忠義の譽末代に武士の鑑と輝きし。双葉の榮今正に。忠臣藏の功を。新に繰る新芝居。繁昌類ひあら金の土も草木も動きなき御代を。壽き奏てけり。

寛政十年戊戌八月十五日

風雅でなし 忠臣一力祇園囀 終
洒落でなし

